

岸恵子（1）横浜生まれ 海や花火 はしゃいだ日々 魅力に満ちた祖父と過ごす

2020/5/1 2:00 | 日本経済新聞 電子版

1932年8月11日、私は父操、母千代子の長女として平楽という山手続きの高台に生まれた。家の周りの原っぱにレンゲ草が咲き、タンポポが群れ、まだ潮の香りが漂う海があった。

青く光って、静かに広がっていた横浜の海。今は石油コンビナートなどで眺望が塞がれてしまっている三溪園の遠浅の海。引き潮の時、いとこたちとはしゃぎながら収穫を競い合った潮干狩り。採れたあさりで母が作ったお味噌汁のいい匂いを思い出す。

にぎやかで華々しかったのは花電車が出る夏祭りの花火大会。ずっどーんとおなかに響く打ち上げの音は、私に空に駆け上るような夢をくれた。いなせな着流しで祭りばやしに拍子を取り、人混みを踊りながら肩車の私を喜ばせた母方の祖父は、まだ若く剽（ひょう）げていて小気味よかった。

「ピーヒャララ、ヒャ、ヒャッ」。両手を空にかざして、幼い私も一緒に歌った。

この母方の祖父は三島（静岡県）の旧家出身である。長男ではなかったので「青い目の異人さんが乗ってきた船が見たい」と横浜へやって来た。沖仲仕（おきなかし）をしてみたり、菊作りの道楽があったり、元町にできた日本初のパン屋で出会ったフランスの領事を自宅に招いて宴会をしたりと、謎と魅力に満ちた人物だった。

お正月には自宅でよくカルタ会を催した。若かった私の父はカルタ取りの名人で、その姿に魅せられた母と結ばれたらしかった。父は実家のある厚木で教師をしていたところ人に推薦されて神奈川県庁に移っていた。

私は両親に連れられて行く山下公園の前に広がる海を見るのが好きだった。

「この海が終わる時、海水はどこにこぼれていくの？」

何でも不思議がる少女だった。海水はどこにもこぼれず、海や陸はつながっていて地球という丸い大きなものに乗っていると知って驚いた。その地球はもっと大きい、果てしない宇宙というものの中に浮いていると聞いて不思議な怖さに取りつかれた。

「果てしないって終わりのないこと？」

幼い頭がこんぐらかった。

ある日、旅行から帰った祖父は家に入らず、庭の井戸に直行した。「コンクールで優勝した菊や樹々には同じ地下の湧水が一番のごちそうだ」と言ってつるべを引き上げた時、うっとうめいて倒れたのだった。私の両親や祖母が体を押さえるほど母がき苦しんで夜半に息を引き取った。

翌日、うっすらとほほ笑んでいる祖父の顔を見て、私は裏切られたような悲しみに暮れた。「ピーヒャララ、ヒャ、ヒャッ」と小さな声で歌ってみた。祖父の顔は動かなかった。狭心症という病名だった。（おじいちゃんの「果てしない」は終わってしまったんだ）と思って涙があふれた。

41年に日本軍が真珠湾を攻撃して太平洋戦争が開戦。小学生の私は父の本家がある厚木（上荻野）に疎開した。

本家は江戸時代から何代も続く旧家で広大な屋敷だった。歴代の当主や家族が刻んだ歴史が色濃く潜んでいた。私はその歴史に取り込まれそうで怖かった。



最近の筆者

父も長男ではなくもともと分家の身である。近くにあった父の弟の田舎家の方が温かい感じで私はそこに疎開した。横浜の
日々は遠くなった。

(女優)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁
じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（2）疎開「ミミズ事件」で仲良しに 地元の子のいたずらに負けず

2020/5/2 2:00 | 日本経済新聞 電子版

疎開した厚木の荻野小学校には私を含めてクラスに女性3人の都会っ子がいた。3人とも成績が良かったので、それがしゃくに障るのか、地元の同級生によくからかわれたり、いたずらされたりした。

勤労奉仕の時間があり、私たちは畑のあぜ道にズラリと座らされた。背負った籠に先生がサツマイモをどさりどさりを入れてゆく。それを近くの農家まで届けるのだ。

号令とともに皆が一斉に立ち上がったが、都会育ちの3人はスツとは立てない。私はお尻が1センチも上がらなかった。ヤンヤとはやし立てられ、先生が「よっこらしょ」とおどけながら手を引っ張ってくれた。よろよろと歩く私は背中にチリリと焼けるような痛みを感じて悲鳴を上げた。

「先生、背中に何かいる」

先生は私の背中に手を突っ込むと、一匹の大きなクロアリをつまみだした。

「誰だ。この子の背中にアリンコを入れたのは」

「おいらだ」

ガキ大将が悪びれもせずに即答したのがおかしくて、先生は「コラッ」とその子の額を小突いただけで終わった。

また別の日には雨でぬかるんだ田んぼで麦踏みをした。時々、ミミズがによろよと地面から出てくる。私以外の2人の都会っ子がキャーと悲鳴を上げた。「都会ものの意気地なし」とはやし立てる男子生徒の顔の前で、私は大きなミミズ2匹を両手でつかんでブラブラさせた。

「ミミズくらい平気よ」

皆がポカッと口を開けた。

父が釣り好きだったので、私は餌のミミズを釣り針に刺して褒められていたのだ。

いたずらはしても皆、気のいい子供たちだった。ミミズ事件以来、少しばかり尊敬されたのか、私たち都会っ子とみんなは仲良しになった。

小6になり、私は女学校入試のために疎開先から横浜へ戻った。自宅近くにフェリス（戦時中は横浜山手女学院）という名門校があったが「敵国のミッション・スクールなどとんでもない」と県立横浜第一高等女学校（現在の横浜平沼高校）を受験した。

高倍率だったが、合格した決め手は時間内に論文を書くこと。テーマは『大東亜戦争について』。作文は得意なのですんなりと合格できた。

敗戦の気配が色濃くなってきても、大本営はひるむことなく日本軍の"戦果"を高らかに放送し続けていた。

1945年3月10日、東京は敗戦を刻印するような大空襲で焼け野原となった。5月29日には私の街、横浜も集中的な無差別爆撃で廃虚と化した。そして8月6日がやって来る。6日の次は9日、広島と長崎に原子爆弾が落とされ、日本は戦争に負けた。



疎開前の小学生時代（後列中央）

横浜空襲の朝は素晴らしい五月晴れだった。けたたましい警報とともに真っ青な空はウンカのように押し寄せるB29という銀色の怪鳥で覆いつくされた。朝日を浴びてキラキラと光る飛び魚のような爆撃機は美しくさえあった。

「あ、きれい……」とつぶやいたのを覚えている。それはほんのつかの間のこと。

B29の大群は身の毛もよだつ恐ろしい本領をむき出しにした。家々や人間を木っ端みじんに破壊する殺人兵器はあたり一面を阿鼻叫喚（あびきょうかん）の生き地獄にした。その頃、科学は命中すると広範囲を焼き尽くす恐ろしい「焼夷（しょうい）弾」を発明していたのだ。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（3） 横浜空襲 防空壕を飛び出し助かる 「ここにいたら死ぬ」大人振り切り

2020/5/3 2:00 | 日本経済新聞 電子版

空襲の朝、父はすでに出かけていた。母が湯船に張ってある水に羽根布団を浸し、私をすっぽりと包んで言った。

「山手公園のテニスコートに逃げなさい。曲がり角の松のところで待っていてね」

玄関でなく裏口へ走る母を私は悲鳴を上げて追った。

「お母さん、どこ行くの」

「お隣が留守で赤ちゃんがひとりで寝ているの。恵子は大丈夫ね。もしはぐれたら小学校の講堂に行くのよ」

青ざめた顔でニコツと笑い、12歳の私を置き去りにした母は敏しょうな小動物のようで美しかった。焼夷（しょうい）弾のすさまじいさく裂音が鳴り響き、鼻孔から胸まで焼けつきそうな臭気が漂っていた。



父と母と一緒に記念撮影（4、5歳の頃）

視界をザザーっとなぎ倒す爆風。そこそこに飛び散る火柱。低く身をかがめて走る私にビショぬれの布団が重たかった。

逃げ惑う人たちが公園の土手を掘った急ごしらえの横穴の防空壕（ごう）に向かって殺到していた。私はその流れに逆らって走った。母は「公園に逃げろ」と言った。「防空壕に入れ」とは言わなかった。

公園の石段に若い女性が斜めに傾いて座っていた。防空頭巾が煙を吐いて焦げていた。喉が焼けるように痛い。声を出せずに夢中で肩を揺ると、硬い体が私の上に倒れてきた。鉛のように重かった。女性は目を見開いたまま死んでいたのだった。蠟（ろう）色の頬に焼け縮れた髪の毛がはっていた。死体の下で身動きができない私を腕章を巻いた若い兵隊が助けながら怒鳴った。

「おまえはこんなところで何をしている！ 子供はみんな防空壕に入るんだ」

兵隊は母のぬれ布団を私から引きはがした。一部に火が付いて焦げていたのだ。

砂利道を引きずられ、放り込まれた防空壕は子供や大人たちでひしめいていた。土を掘ったままの暗い穴を見た瞬間、「ここにいたら死ぬ」と思った。止める大人たちを振り切り、私は地獄の中へ飛び出した。焼け焦げて熱くなった公園の道をバツタのように飛び跳ねながら走った。

母が言っていた公園の曲がり角の松に、なぜか私は夢中でよじ登った。木登りは得意だった。するとB29よりも小さな米軍機が地をはうような超低空飛行で機銃掃射してきた。私のすぐ傍を通り過ぎる時、機体の窓からパイロットの青ざめた横顔が見えた。

その瞬間、耳をつんざく轟音（ごうおん）が聞こえ、直撃弾を受けた私の家がふわんふわんと踊るように揺れながら燃え崩れた。お化けのように低いうめき声を上げ、ペチャンコに潰れてゆく家から我が家のかけらたちが飛んできた。

海外で仕事をしていた叔父がお土産にくれたビー玉のように美しい首飾りが碎け散り、私をめがけて飛んでくるような気がした。

「燃えろ、燃えろ」

私は呪文のように唱えながら松の木にしがみつки、恐怖でガタガタと震えていた。

隣家の赤ちゃんを抱いた母に会えたのは小学校の講堂に爆弾が落ち、炎や煙で息苦しくなった時である。もうもうとした煙の中から現れた母が私を見付け、泣きべそ色の笑顔になった。

防空壕にいた人のほとんどが爆風と土砂崩れで死んでしまった。大人の言うことを聞かずに飛び出した私だけが助かった。

「もう大人の言うことは聞かない。今日で子供をやめよう」と私は思った。

(女優)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（4）敗戦 天皇陛下の写真で実感 直立不動でマッカーサーと

2020/5/4 2:00 | 日本経済新聞 電子版

空襲の翌日。親族の安否を尋ねて父と一緒に横浜の廃虚を歩き、無数の死体を見た。

川に浮いた土左衛門。黒光りした焼死体。それらがトラックの荷台に積み上げられてゆく。その都度、父が私の目を手で覆ったが、それでも私は見てしまった。前日まで生きていた人たちのすさまじく変わり果てた亡骸（なきがら）を。

高台にある掃部山（かもんやま）公園に着くと父が「これが井伊直弼の銅像だ」とつぶやいた。その銅像よりも、私は掃部山を含む野毛山から海までが見渡せる街全体が平べったい瓦礫（がれき）となって燃え続けている眺めの方にむごたらしさを感じた。



空襲で焼けた横浜街（1945年）＝共同

空に腐った柘榴（ざくろ）のような黒い太陽が血の色を刷き、瓦礫から生き物が焼けただれた異臭が漂う。戦争がもたらす実態をまざまざと見せていた。

敗戦を実感したのは8月15日の玉音放送ではなかった。9月27日、赤坂の米大使館で昭和天皇がGHQ（連合国軍総司令部）の最高司令官ダグラス・マッカーサーと対面した写真を見た時だった。

ラフな開襟シャツのマッカーサーの隣で正装した天皇陛下は直立不動の姿勢だった。「日本は負けた」と思った。

食糧難もひどかった。親戚に農家がない私の家では母の訪問着が僅かな米やジャガイモに替えられていた。一緒に列車で買い出しに行った私は、人々が背負っている食料を慌てて車窓から捨てているのを見た。闇物資の摘発を逃れるためだ。無情に捨てられた食料は線路脇に待機した人たちが奪ってゆくに違いない。

ある時、買い出しの収穫がなくて母としょんぼり歩いていると、米兵を満載したジープが脇に止まり、チョコレートの包みを私にくれようとした。母の硬い視線に躊躇（ちゅうちょ）している私を見て、米兵は缶詰が入った紙袋を道端に投げて笑いながら「バイ」と走り去った。夢中で駆け寄った私の頬に母の平手が飛んだ。

「だって……」

「いけません」

私は米兵が投げた紙袋を見ず、前だけを見つめて大股の速足で歩いた。意味の分からない涙が頬をぬらした。

戦後の復興は早かった。ガード下にうずくまる戦争孤児たちに白い粉末の殺虫剤DDTがかけられ、そこそこに熱気が渦巻く闇市が立った。

「いざ来いニミツ、マッカーサー。出てくりゃ、地獄へ逆落とし……」と歌っていた日本人はあっけなくマッカーサーになびいた。変わり身はあまりにも早かった。

我が家ではサツマイモの茎が主菜のおかゆを父が端然とすすっていた。私はチョコレートケーキを食べた夢を見て胃けいれんを起こした。「胃がビクリして空風呂を炊いたんだろう」と父は言った。

学校で堂々と蓋を開けた同級生のお弁当が白米に青菜まで添えてあるのを見て、私はふかしたサツマイモだけのお弁当を蓋で隠して食べた。

混乱に乗じて巧みに財を成した者もいれば、父のように清廉を貫いた人もいる。そんな父を清々（すがすが）しいと誇りに思ったり、頼りないと思ったりした。

父は栄誉栄達に関心がなく、多趣味に明け暮れた人だった。県庁にテニス部を創設し、岸杯という対抗戦を主催した。琵琶を弾き語り、三味線や小唄もうまかった。顔形はそっくりなのに、美声のDNAは私を通過してしまった。躰（しつけ）に厳しかった母とは正反対で小言を言われたこともない。けれど私が学校に上がる前から仮名は全部、かなりの漢字も教えてくれた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（5）泥棒と痴漢 戦後 忘れられない優しさ オンリーさんに助けられる

2020/5/5 2:00 | 日本経済新聞 電子版

敗戦から1年ほどがたった。戦後の飢えや物資不足の中で日本人には肝の据わった強さや優しさがあった。そんな時代の忘れられないエピソードを書き留めたい。

私が学校から帰ると家には必ず母が待っていてくれた。横浜で唯一焼け残った親戚が疎開先の九州へ住みついたので、庚台（かのえだい）にあったその家を父は仮住まいとした。空襲の傷痕は生々しく、庭にはまだ不発弾が突き刺さっていた。

ある日、学校帰りの私が「ただいま」と玄関を開けると珍しく母がいなかった。と同時に「泥棒！」と叫ぶ母の声が聞こえた。その家は幅広の緩やかな坂の上から3番目にあった。家から下は畑だった。そのあぜ道を母が夢中になって走っている。

「泥棒、お釜返して」

母の悲鳴の100メートルほど先に唐草の風呂敷を背負った男がつんのめりそうな様子で必死に逃げていた。泥棒を追う母を私が追った。ついに泥棒を取り逃がし、畑にへたり込んだ母が悔しがった。



学校帰りの夜道で痴漢に襲われた13、14歳頃

「苦心して手に入れた白米のご飯を炊いたのよ。ピッカピカの白米よ。まだ蒸らしている最中だったのに」

親族に農家がない都会者が白米を手に入れるのは大変だった。母は私に真っ白なご飯を食べさせたかったのだ。

別のある日。小ぬか雨が降る夕方、野毛山の図書館から帰る私は木々の生い茂る暗い坂道で痴漢に襲われた。後ろからいきなり抱きついてきた男に教科書の詰まったカバンを振り回してあらがった。

「助けて！」

あらん限りの声で叫んだ。左右に振り回したカバンの勢いが余って、痴漢も私もぬかるみに足を取られ、滑って転んだ。相手は小男だった。私はさらに叫び続けた。先の泥棒事件からまだ間もない頃で私は13、14歳だった。

坂道には新築の家々が建ち、窓から明かりが漏れていたが、それらの窓は私がいくら叫んでも開かなかった。

突然、暗闇を走り寄ってきた大柄な若い女性が「こら、何をする」と痴漢の腕をつかみ、手に持ったフライパンを振りかざした。「あんなバンバンがいて風紀が悪い」と噂されていた黒人米兵のオンリーさん（私娼）だった。

私の叫び声を聞いて駆けつけてくれた彼女はぬかるみにはだして仁王立ちになっていた。その時、戦後丸出しのトタン張りのひしゃげた小屋のドアが開き、背の高い黒人兵がゆったりと近づいてきた。

おびえ切った痴漢の腕をねじ上げ、ドスのきいた低い声で何かを怒鳴った。痴漢は貧相な顔を真っ青にして全身が波を打つように震えていた。

黒人兵はまた何かを怒鳴り、痴漢の背中を蹴飛ばした。「ひゅえ～」と悲鳴を上げながら痴漢は坂を転げ落ちるように逃げて行った。

「ホワイ？」

なぜ痴漢をそのまま見逃したのかといぶかしむオンリーさんに「状況はかなり違うけど、僕は戦場でああいうおびえ切った顔を見過ぎてきたんだ」というようなことを言って彼は肩をすくめた。その肩に戦争を体験してきた人間ならではの独特の哀れみの情が見えた気がした。

2人は夜になった暗い坂道を私の家まで送ってくれた。けれど、なぜか家の玄関には近づこうとしなかった。

「私みたいな者を見たら、お母さんがびっくりするよ」

2人は「バイバイッ」と手を上げて夜の中に消えていった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（6） 恩師 数学の先生、説教と笑顔 「人生は短い。好きなことをやれ」

2020/5/6 2:00 | 日本経済新聞 電子版

1948年4月、県立横浜第一女子高（現在の横浜平沼高校）に進学した私は演劇と舞踊のサークルに所属し、週3回、東京・銀座の交詢社ビルにあるバレエ教室に通った。川端康成先生の小説「花のワルツ」を読み、バレリーナになることを夢見ていた。

授業が終わると、同級生の田中敦子さん（後に女優の小園蓉子さん）と横浜駅に全速力で走り、東海道線の列車に飛び乗る。敗戦の爪痕がまだ癒えない時代。ちょっとした旅行に出かけるような夢をかき立てる日々だった。

私の超得意科目は国語だった。歴史や地理など社会科にも興味は持ったが、数学はゼロ、英語も苦手だった。英語教師は寒川神社のご令息でクラスの誰彼となく随意に指名し、英文を読まされる。

予習をしていない授業の日。「ミス、ミス……」と言いながら先生の視線が私に止まると、私はおなかに力を込めて先生をグッとにらむ。先生の視線がちょっとうつき、「ミス、ミス……保谷」と隣の保谷さんを指す。



小園蓉子さん(左)と（新人女優の頃）

「割食っちゃうわ。あの先生、恵子さんのことがお気に入りなのよ」と嘆く保谷さんは「お姑（しゅうとめ）さん」というあだ名の面倒見の良い人だった。

私は早速、ノートをちぎって即席川柳をクラスに回す。

寒川や

ミス、ミス、ミスと

保谷（ほや）かしぬ

そんな私を支持する学友もいたが、逆に視線を斜めに滑らせ、女性の本性であろう嫉妬ともいえる敵が心隠さない学友もいた。国語の教師たちは私の文学に対する興味や作文をめでてくれた。

けれど大好きだった担任の数学の団先生には自宅に呼ばれて、こっぴどく叱られた。

「君は傲慢なんだよ。頭はすこぶる良い。他の科目も申し分ない。だから苦手な数学なんかやらなくて良いと高をくくっていないか？ 君にできないはずがないのにやろうとしない。立派な根性だ」

憤っているのに諄々（じゅんじゅん）と諭す団先生の口調に私は声も出なかった。団先生はヒョロリと背が高く、長い顔にかかるボサボサ髪をうるさそうにかき上げる。目立ったところもないのに全生徒の憧れだった。

そんな団先生は学級委員をしていた私の答案用紙を返しながら、教壇の向こうから私の目をにらんで言った。

「今日の日曜日、僕の家に来てくれないか」

答案用紙の半分を白紙のまま提出し、数学でまたひどい点数を取ってしまったのだ。

自宅でのお説教は20分ほど続いた。ご母堂に出していただいたお茶にも手が出ず、スゴスゴと帰る私を玄関の外まで見送ってくれた先生が突然、苦しげにせき込んだ。振り返った私が見たのは先生の優しい笑顔だった。

「根性を通せ。君には多くの才能がある。好きなことをやれ。人生は短いんだ。苦手なものはやらなくていい」

「え？」

この日、私が出した初めての声だった。先生はほほ笑んだまま傾いた夕陽を背負って立っていた。

学生時代も、今も、数字というものにはなじめないでいる。その後、社会に出た私が心からお礼を言いたいと思った時、先生はこの世にいなかった。「人生は短いんだ。好きなことをやれ」と言った先生は胸を病み、あまりにも早く旅立ってしまったのだ。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（7）大船撮影所 映画の不思議に魅せられ 学校にも親にも内緒で見学

2020/5/8付 | 日本経済新聞 朝刊

憧れていたクラシックバレエは悲惨な結果となった。

幼い頃の私はおてんばで庭の木でよく鬼ごっこをして遊んだ。晴れたある日の昼下がり、飛び付いた枝が折れて空池にドサリと落ちてしまった。その時に骨折した後遺症が影響したのか、どうしても左脚がきれいに上がらないのだ。どうあがいてもプリマにはなれない身となったが、それでもむなしい夢をよすがにバレエに打ち込んでいた。

レッスンを終えたある日の夕暮れ。同級生の田中敦子さん（後の小園蓉子さん）と有楽町を歩いていると、映画館に掲げられた1枚の写真を見てギョッと立ちすくんだ。

それはジャン・コクトー監督のフランス映画「美女と野獣」のスチール写真だった。毛に覆われた醜い野獣の悲しみに満ちた瞳が切なく美しかった。けれど、私の高校では校則で保護者を同伴しない映画鑑賞は禁じられていた。

「ここは東京よ。校章を外せば平気」

ひるむ敦子さんを引っ張って見た映画は私の一生を大きく変えることになる。白黒の映像は美しく、私は「映画」という不思議に魅せられた。

「彫像の目が美女を追いかけてどうして動くの？」

「燭台（しょくだい）の腕が美女の足元を照らして動くのはなぜ？」

胸の中に謎が散らばった。謎は解かなければならない。

「叔父が松竹大船撮影所の所長さんと親友だから、一緒に撮影を見に行きましょう」と敦子さんが誘ってくれた。

大船撮影所に見学に行ったのは学校にも親にも内緒だった。大きなステージの中は暗くて埃（ほこり）っぽく、怒鳴り声が飛び交い、雑然としていた。

ステージの真ん中にしゃれた洋室が建てられ、きれいな女性が男性と向き合っていた。「李香蘭」という人だと所長の高村潔さんが教えてくれた。私はそのカップルよりも2人の前にデンと座っている大きな物体に圧倒された。

分厚い布団を着た妖しげな代物はミッチェルという撮影機で稼働するとジージーと音がするのでセリフを録音するために布団をかぶせられていた。布団の割れ目から大きな「眼」が黒く光っている。それが私の半生を虜（とりこ）にした「レンズ」という魔物だった。

布団を割って1人のおじさんがヌウツと顔を出した。その人が「本番行こうか」と言った途端、耳が裂けそうなほど大きなベル音が鳴り、辺りがシーンと静まり返った。

ステージを出ると、俳優養成所の洋館が見えた。ガラス張りの部屋で十数名の男女がダンスや運動を習っていた。

「背筋をもっと伸ばして」

「膝を曲げて歩かない」



松竹大船撮影所＝松竹提供

キビキビと声をあげる人物は新人たちに優雅な挙措を教えるために映画会社に招かれたダンスの先生で新人女優よりもずっとすてきだった。

その先生は後に津島恵子という女優になり、「お嫁さんにしたい候補ナンバーワン」の大スター、そして松竹の宝物となった。

撮影所の見物を終えた私たちが門へと歩いていると、ポンと肩をたたかれた。ステージの中で布団から顔を出したおじさんだった。「ケーキでもごちそうしましょう」と言い、「ミカサ」というレストランへ連れて行ってくれた。

レストランでおいしいケーキをペロリと食べた私の顔をしみじみと見て、おじさんが言った。

「お嬢ちゃんたち、女優になりたいと思いませんか」

私は撮影が見ただけだった。その人が有名な巨匠、吉村公三郎監督だということも知らなかった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（8）女優デビュー「大変な世界」ほぞをかむ 女学生の役、現場で笑われ

2020/5/9付 | 日本経済新聞 朝刊

「研究生という名目で門もステージもフリーパスにするので遊びに来てください」

松竹の大船撮影所の高村潔所長に言われたのは撮影所を見学して間もないことだった。学校の授業やバレエ、茶道、華道の稽古などに忙しかったが、私は同級生の田中敦子さんと映画撮影というものをたまに見に行った。

高3の春休み、私たちは後に監督になる野村芳太郎さんに請われて教育映画「アメリカ博覧会の一日」に女学生役で出演した。その体験に強い刺激を受けた私は「梯子段（はしごだん）」という短編小説を書いた。

いとこの夫に若槻繁という人がいた。「人間の条件」「怪談」など傑作映画を世に送り出す大プロデューサーになるが、この時は川端康成先生のまな弟子で、雑誌「ひまわり」の編集局長をしていた。

私の小説を読んだ若槻さんが「恵子ちゃんは女優よりも作家になったほうがいい」と言い出し、川端先生の定宿だった東京・四谷の料亭旅館、福田家に私を連れて行った。

私は身分違いの雰囲気におののき、湖のように深い大作家の目に見つめられて手から桜茶を落とした。畳にこぼれた桜茶をワンピースで拭きながら、自分のつたない小説を座布団の下に滑り込ませて恥じ入っていた。そんな私を大作家はじっと見ていらした。

（物書きはああいう目をしていなければダメなんだ）

料亭を出て歩く私の脚に桜茶でびしょびしょにぬれたスカートがまとわりついた。

高校の卒業試験が終わり、大学入試の準備に専念していた時、松竹から映画「我が家は楽し」に女学生役で出演してほしいと申し出があった。

入試も気になったが、映画というものも体験してみたかった。「これ1本だけ」と両親に頼んで出た映画がヒットし、私は主役、准主役など多くの映画に出て、結局は女優街道を走る身となった。

初めて体験した撮影現場で「大変な世界に入ってしまった」と私はほぞをかんだ。

カメラマンが私の顔を見ながら「ちょっとわらってみようか」と言う。「なぜ笑うんですか」と聞いたら、「あんたじゃないよ。後ろの茶たんすを外せということだよ」と言ってみんなが笑った。

また私の顔を見て「ちょっと顎をあげようか。もうちょい」と言う。たまらず「これ以上あげたらひっくり返ります」と答え、「あんたの顎じゃないよ。お二階さんのライトの顎だよ」と言って、スタッフが面白がった。

（主語をはっきり言えよ）

私は心の中でつぶやいた。

ライティング待ちの間、寒かったので真っ赤に燃えるドラム缶の炭火を囲んで父親役の笠智衆さん、母親役の山田五十鈴さん、長女役の高峰秀子さんが談笑していた。大学をあきらめきれない私は教科書にのめり込んでいた。

「恵子ちゃん」と高峰さんから声がかかった。「撮影所で読んでいいのは脚本だけよ」「ごめんなさい」と謝りながら私は「怖い」と思った。秀子さん恐怖症になった。



高峰秀子さんと共演した「我が家は楽し」（1951年、中村登監督）＝松竹提供

私と敦子さんは相変わらず研究生という身分だったので主役を務めながら、その他大勢や通行人としても出演した。眠る間もない毎日を私たちは結構面白がって過ごした。

煤（すす）けた畳の大部屋の隅っこに岸恵子、小園蓉子という2つの名札がかけられた。ちっちゃな名札は風が吹くとぶつかり合ってカタカタと鳴った。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（9） 主役 黒澤明脚本の「獣の宿」 「山猫みたい」野性的に演じる

2020/5/10付 | 日本経済新聞 朝刊

松竹の大船撮影所は木造の洋館が点在するモダンで明るい雰囲気だった。春になると桜並木が見事なトンネルを作る。その並木の右側が女優館、左側が男優館である。

女優館に入ってすぐに男優が準備をする床山室があった。「なぜ女優館にあるのだろうか」と不思議に思っていたら、ある日、床山さんに呼び出されて「ひい、痛っ」と私は悲鳴をあげた。いきなり髪の毛を2、3本抜かれたのだ。

「ごめんね。自分の毛で付け睫毛（まつげ）を作るのよ」

「どうして！ 私の睫毛は長いです……」

当時のフィルムは感度が悪く、ドーランは厚塗り、眉も睫毛も誇張しないと映りがぼやけてしまう。おまけに糊（のり）がニスのようにドロリと重く、つけると目が開けられないほどしみる。はがすと自分の睫毛まで抜けるという恐ろしい代物だった。だから今の私には睫毛がほとんどない。

床山室の隣に「結髪（けっぱつ）室」があった。名前の通り髪を整えてくれるが、今のようメーキャップ・アーティストなんていない。学生から映画界に入ったばかりの私はドーランを渡されてもどうしていいかわからず、闇雲に塗りたくって酷い顔になった。

「恵子ちゃん、せっかくの顔が台無しだよ」と悲鳴を上げた結髪さんが化粧を教えてくれた。以降、なにかと世話をしてもらうようになった。

ある日、演技課長に呼ばれた。「昨日のロケになぜ行かなかったんだ」。私は本名を呼び捨てにされるのが嫌で芸名を考え、毎週変えていた。最後に決めたのが白鳥の湖をもじった「諏訪碧」だった。

「なんて読むんだこれ」

「すわみどりです」

「なんだそりゃあ。男の名前だよそりゃ。自分にも読めないから、予定表にあった名前を見つけないかったのか」

予定表を見忘れたただけだったが、芸名は認められず本名の岸恵子にされてしまった。

間もなく私は京都へ行かされた。映画の女性主役がなかなか決まらず、候補の女性スターが寝台車に乗っているとかで、顔を合わせないようにしたのか、同じく首実検に呼ばれたらしい私は三等車にチコンと座って夜を明かした。

京都撮影所の暗いステージに入ると1人の男性の横顔がライトに浮かんでいた。「ご挨拶して」とプロデューサーに促され、私は誰へともなくぎごちない最敬礼をした。カメラ横から監督が身を乗り出し、横顔だった人がゆっくりと私を見つめて正面の顔になった。その瞬間、主演が私に決まったということだった。

プロフィールから視線を移動して私を見たその顔にデカダンともいえる妖しい風景が漂っていた。暗い戦後をくぐり抜けた当時の若者たちを、二ヒルともとれる生々しい危うさで魅了した鶴田浩二という人だと私は知らなかった。

映画は黒澤明脚本の「獣の宿」。私は湖畔の旅館の孫娘で野性的な女の子だったように思う。あるいは私がやったから野性的になったのか。

カメラマンが言った。



湖畔の旅館の孫娘役を演じた「獣の宿」
（1951年、大曾根辰夫監督）＝松竹提供

「目がキラキラとつり上がって、山猫みたいなすごい女の子が出てきたと思った」

鶴田さんは私を壊れ物のように大事にしてくれた。

「今のままでいなさい。この世界のあくに染まって、女優臭くなっちゃダメだ」

（私はそれほど素直で簡単な女の子ではないのよ）と言いたかったが胸の中でつぶやくだけにした。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（10）スター 人気者、でも研究生扱い ギャラの差にあぜんもめげず

2020/5/11付 | 日本経済新聞 朝刊

いつの間にか私はスターと呼ばれるようになっていた。

けれど身分は相変わらず大部屋所属の研究生。主役を掛け持ちしてもギャラはなく、月に研究費として4500円を支給されるだけだった。

「それも3回に分けて1500円。ロケに240円の手当が出たの覚えてる？ ニコヨンだって大笑いしたわね」

去年、私の舞台「わりなき恋」を見に来てくれた小園蓉子さんと昔話に花が咲いた。

待遇に不満はなかった。不満は映画の内容だった。娯楽が少ないこの時代。2、3本立ての大量生産が当たり前でお粗末な内容が多かった。電車の中で私は大部屋の女優仲間に爆発状態で言った。

「ヘンテコな題名のつまらない映画に出るのは嫌！」

翌日、所長に叱られた。

「電車の中で大監督の悪口を言っちゃいかんよ」

「大監督って誰ですか」

「君が出ている映画の監督だよ。電車の中で君のすぐ後ろに座っていたらしい」

「きゃー、そんな偉い人が三等車に乗ってたんですか」

私のトンチンカンな反応に高村所長が苦笑いした。

その映画は「相惚（あいほ）れトコトン同志」。監督は鬼才とうたわれた川島雄三さんだった。

別の日、また所長に呼ばれた。「何を怒られるのか」と覚悟した私はまず所長室前の秘書室に入った。秘書の女性が慌てる様子が見え、目を上げると窓際に契約書が10枚ほど乾かしてあった。半紙に筆書きされた旧漢字でたっぷりした墨がまだ光っている。

面白いことに、主役も中堅も一律で1本50万円だった。（私、彼らの百分の一にもならないの？）とあぜんとしたが、めげたりはしなかった。

「人気者なのに研究生扱いはないだろう」と佐田啓二さんが陳情してくれたらしい。作品は覚えていないが初めてギャラをいただいた。50万円にはほど遠い3万円程度だったが「やっと女優になったかな」という感慨があった。

遠出のロケは相手役の車に乗せてもらった。ある日のロケ帰り、便乗させてもらった鶴田浩二さんに「なぜ暗い道を走るの？ ネオンのキラキラした街を走りたい」と言った。「ここは山の中なんだ」と困惑する鶴田さんに私は日ごろの思いをぶちまけた。

「銀座の真ん中を鶴田さんと2人で歩いてみたい」

「恐ろしいことを言うお嬢さんだね」

「なぜ天下の大道を2人で歩きちゃダメなの？ 男と女だから？ スターだから？」



恋人役での共演が多かった鶴田浩二さんと

山の頂上で車は止まった。

「さ、降りて。天下の大道を2人で歩こう」

「こんな暗い山の中は嫌。明るい天下の大道がいい」

「ま、降りて見なさい。ネオンなんかよりきれいな星がキラキラしている」

あまりの美しさに私は息をのんだ。満天の星が手を伸ばせばつかめそうだった。

「すごく高い山なのね」

「天下の嶮（けん）と人の言う、山の名前は箱根でござんす」

私は踊りながら、笠置シヅ子さんが聞けば顔をしかめそうな調子外れな声で歌った。

●（歌記号）トッオキョブギウギ〜、リズムウキウキ〜、ココロズキズキワクワク〜〜

次の瞬間、私の片足がズブズブと冷たいところに落ち込んだ。

「きゃ、変な臭い」

「あぜ道から肥やしをまいた田んぼに落ちたんだよ」

「なぜ天下の嶮に肥やしをまいた田んぼがあるの！」

満天の星とロマンチックとは言えない肥やしの臭いの中で2人は笑い転げた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（11）君の名はメロドラマの神髄を会得 大ヒット、町を歩けば人の山

2020/5/12付 | 日本経済新聞 朝刊

「君の名は」の主演、氏家真知子が振り当てられた時には困惑した。人気ナンバーワンの津島恵子さんが「ひめゆりの塔」の沖縄ロケで不在だったので仕方なく回ってきたのだが、どう考えても私ではミスキャストだと思った。

「そうだよなあ。恵子ちゃんの顔見て、観客が泣くかなあ。これは社運を賭けて作る大メロドラマなんだよ」

「風船ゴリラ」とあだ名を付けたプロデューサーの山口松三郎さんがお相撲さんのような体をごめて私の顔を眺めた。その懸念を吹き飛ばすように観客は泣いてくれた。思わぬ大ヒットとなり、松竹は本社ビルを建て、相手役の佐田啓二さんと私はご褒美としてオメガの時計を頂いた。

「君の名は」の成功は大庭秀雄監督のすてきな人柄が多くを担っていたと思う。個性的な役が多かった私に大庭監督は戸惑っていた。佐渡島へ渡る船で真知子が泣くシーンで突然、涙を誘うような悲しげな音楽が流れたので私は吹き出してしまった。

「音楽止めて」。大庭監督の目に了解の色が浮かんだ。この瞬間、私という女優の本質がつかめたと大庭監督は何かにかかれていた。感情移入のために流してくれた音楽だったのに、そんな思いやりが私には照れ臭かったのだ。

大庭監督はすれ違いばかりのメロドラマを俗に落とさずに風格を持った作品に仕上げた。スタッフは常に明るく、佐田さんや私もその雰囲気作りに寄与したかもしれない。

メロドラマを撮るスタッフはサバサバと明るかった。後に「男はつらいよ」に出演した時、雰囲気の違いに驚いた。渥美清さんの大道売りの口上は大好きだが、（観客を笑わせるのは泣かせるよりも難しいんだ）と山田洋次監督の真剣な面ざしに感じ入った。

山田監督は「たそがれ清兵衛」で私にナレーション全編と清兵衛の次女の老年期を任せてくださった。私のしゃがれ声にナレーションを任せてくれたのは山田さんと今野勉さん（テレビマンユニオン最高顧問）の2人だけである。うれしかった。

約10年前、人を結ぶのに熱心だった津川雅彦さんが催した会食で佐田さんの長男、中井貴一さんに初めて会った。

「『親父はなぜあんなに良いコンビだった岸恵子さんと結婚しなかったの?』とおふくろに聞いたんですよ」

岩下志麻さんや岸本加世子さんもいる席で貴一さんが言った。佐田さんは時として芸能人が持つ非常識で破天荒な言動とは無縁で常に良識ある社会人だった。何かと気を配ってくれる大好きな先輩だったが、兄妹のような信頼と愛情を超えるものはなかった。

「つまらないなあ。誰に聞いても親父は良い人で欠点がない。たまにはデマやゴシップを聞いてみたいですよ」

貴一さんの言葉に笑った。

「君の名は」のおかげで私は松竹メロドラマの神髄、物憂い肢体の動き、伏し目がちな視線などを会得した。けれど奪われたものも甚大だった。町を歩けば人の山。ベタベタと体を触られる。襟で顔を隠して人混みを猛烈な速さで歩くのも性に合わなかった。

そんな私を救ってくれたのが小林正樹監督の「壁あつき部屋」である。巣鴨拘置所に服役したBC級戦犯の実話で私は火葬場の火夫を父に持つ娘役。10代のおぼこな娘が赤線地帯に落ちるまでを演じた。



「君の名は 第三部」（1954年、大庭秀雄監督）で佐田啓二さんと松竹提供

涙に暮れる真知子から激しく豹変（ひょうへん）する女をどう演じるのか。消滅しかけていた私の闘志に火が付いた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（12）にんじんくらぶつまらぬ役 出演に「ノー」 女性だけのプロダクション設立

2020/5/13付 | 日本経済新聞 朝刊

服を脱ぎ、パンティとシュミーズだけになる——。「壁あつき部屋」の設定に私はパニック状態になった。BC級戦犯の実録だったため、作品は米国への配慮でしばらくお蔵入りとなり、かなり後の1956年に封切られた。撮影は「君の名は」の一部か二部のすぐ後だったと思う。

真知子熱が高まり、スターと騒がれてもまだ私にはマネージャーも、付き人も、運転手付き車もなかった。「どこで服を脱ぐ?」「赤線地帯の現場で衆目の中?」「嫌だ」——。覚悟を決め、ロケバスの中で服をかなぐり捨てた。

スタッフが驚く中、迷いはなかった。ロケバスを飛び降り、新宿2丁目の大通りをシュミーズ1枚にはだして歩くとヤジが飛んだ。「真知子さーん。体が丸見えだよ。オッパイまで見えてるよ」。本物の娼婦たちがはやし立てた。

暑い日なのに肌にさざ波のような悪寒が走り、「私は今、女優になった」と思った。

54年のキネマ旬報ベストテンで「七人の侍」（3位）を超えて話題をさらった「女の園」（2位）は学園闘争を描いた作品で私は物おじしないクールな女学生を演じた。

この頃、私は「演技者にも作品を選ぶ自由が欲しい」としみじみ思っていた。睡眠時間は3時間未満。訳もなく早撮り映画をたらい回しにされることに耐えられなかった。



シュミーズ姿で出演した「壁あつき部屋」

「女だけのプロダクションを作りたい」。先輩だったが年が近い久我美子さんと意気投合した。「でも2人じゃ寂しいわね」と久我さん、「有馬稲子っていう威勢のいい人がいるじゃない」と私。

こうして無鉄砲な女優3人は54年4月、「文芸プロダクションにんじんくらぶ」を設立する。つまらない役には映画会社に「ノー」と言う権利が欲しかった。代表には私を川端康成先生に引き合わせた若槻繁さんが喜んでなってくれた。俳優の自由を縛る五社協定が「3人を干す」と息巻いたそうだが、私たちの仕事が途切れることはなかった。

野村芳太郎監督の「亡命記」が55年にシンガポールで開催された東南アジア映画祭の出品作となり、令夫人から神戸の日雇い労働者に落ちぶれるまでを演じた私はそこで最優秀女優主演賞を頂いた。

授与式前夜、受賞するとは夢にも思っていなかった私は大きなベッドにつられた蚊帳をくぐり抜け、暮れなずむ波打ち際の庭に出た。レトロな木造建てのシービューホテルは南シナ海とマラッカ海峡に抱かれるように鎮まっている。コバルト色の海の向こうに真っ赤な太陽が沈んでゆく素晴らしい夕暮れ時だった。

燃える太陽に染まりながら、横浜空襲の直撃弾で飛び散ったビー玉の首飾りをふと思い出した。「シンガポールの大きな太陽は沈む時、海も人も朱に染めてゆく」。その首飾りをお土産にくれた叔父の言葉が浮かび、芝生の上に大の字になって横たわった。私の体も、私の未来も、朱に染まってゆくのを感じた。

最優秀女優主演賞のトロフィーは大きな金色の地球儀の上にライオンが前脚を乗せて吠（ほ）えているという恥ずかしいほど派手なものであった。次回作が待っていたため、私は翌日の早朝にシンガポールを発った。

その私を追いかけて世界の巨匠、デヴィッド・リーン監督が日本へ来てくださった。「亡命記」で受賞したおかげで急に世界が開けた。というより、私が世界に飛び出すきっかけとなった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（13）世界へ 外国人監督から依頼続々 燃える好奇心、英仏へ語学留学

2020/5/14付 | 日本経済新聞 朝刊

1955年6月に来日したデヴィッド・リーン監督は次回作「風は知らない」の主役に私を抜てきしたことを正式に発表した。銀座の喫茶店で私はしゃちほこばっていた。

彫刻のように端正な面差しのリーン監督に見つめられ、緊張した私はミルクをコーヒーカップから10センチも離れたテーブルの上にポタポタとこぼしてしまった。私は慌てるとカップのないところに飲み物を注ぐ癖があるらしい。

リーン監督が笑った。

「サビー（映画の主人公の名前）にもおちゃめなところを書き加えましょう」

その年の大みそかに私は英語をマスターするためにロンドンへ発った。南回りで7つの国に降り、7つの初日の出を見た。最後の中継地パリに着いたのはボタン雪が降る1月2日。小説「凱旋門」に描かれたシャンゼリゼが見たかったのでパリに1泊した。



来日したデヴィッド・リーン監督(左)やリチャード・メイソンと（横浜の自宅）

亡命医師とイングリッド・バーグマンふんするヒロインがカルバドス（仏ノルマンディー地方の蒸留酒）を飲んだカフェはどこだろう？

世界的なヒット映画にもなった「凱旋門」は当時の若者が熱狂した物語だった。その日のシャンゼリゼ大通りは降りしきる雪で煙っていた。はるかかなたに幻のような凱旋門がそびえ立っていた。

私はコンコルド広場から幻へ向かって歩いた。凱旋門の壮大さに息を飲みながらシャンゼリゼ大通りを振り返り、（なんて美しくて寂しい街なのだろう。こんなところに私は住めない）と思った。1年半もたたずにパリの住人になろうとは夢知らず……。

リーン監督の「風は知らない」はプロデューサーの急死によりクランクイン直前に撮影中止となってしまった。

原作者リチャード・メイソンさんが夫妻で私を温かく迎えてくれたが、後半は英中部レスターシャーの学校に移った。寄宿舎で聞いた撮影中止にはかなりの衝撃を受けた。

その私に「亡命記」を見たというフランスのイヴ・シャンピ監督から「長崎の台風」への出演依頼の電報が届いた。彼の「悪の決算」を2度も見て感激していたので急きょ、フランス語習得のため、パリに移った。目まぐるしい変化に私の好奇心は燃えた。

大船撮影所からロンドン、ロンドンからパリ、英語からフランス語——。私の生活環境は著しく変わっていった。

驚いたことに出演が決まった「長崎の台風」のプロデューサーから、額は忘れたが莫大な出演料の一部を頂いた。それを3カ月滞在のパリで全部使い果たしてしまった。

帰国の日、エールフランスのカウンターで私は必死に抗議していた。のみの市で買い集めた大量の骨董品のせいでひどい超過料金を請求されたが私はすでに文無し。隣に英語でチェックインする大きくて強そうな人がいた。

「お隣の男性、私の体重の3倍はあると思います。私と荷物を全部合わせても、彼の体重にはなりません」

「体重と荷物は別です」

必死な陳情の末、日本で後払いすることで決着した。

後に「忘れえぬ慕情」（「長崎の台風」から改題）の撮影中だった私に「僕は朝鮮人です」という手紙が届いた。

「僕はあなたがパリの空港で『私の体重の3倍はある』と抗議なされた時の男です。力道山といいます……」

プロレスというものは見たこともないけれど、この頃の私には摩訶（まか）不思議な偶然や出会いが重なった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（14）イヴ・シアンピ 骨太な人柄 監督に惹かれ 「互いの郷を尊重」決断に魅力

2020/5/15付 | 日本経済新聞 朝刊

1956年当時、日本で海外との合作映画を作ることは難しかった。まず題名の「長崎の台風」に制作会社の松竹から注文がつき、邦題が「忘れえぬ慕情」に変わった。

直前にロンドンやパリを見聞していた私は日仏両国に根付く異なる気質や習慣が感じられて、ハラハラしたり、面白がったりした。当時の日本には「我が聖なる国ニッポンが外国人なんぞに分かってたまるか」というコンプレックス混じりの神経質な誇りがあったように思う。

最大の問題は撮影時間だった。フランスの俳優の多くには舞台がある。舞台が終わるのは真夜中。夜食をとり、寝るのが朝方なので撮影は昼に始まり、夜8時まで一気に撮る。日本では朝9時に開始、夕方5時6時に夕食だが、フランスのスタッフはそんな時間にはおなかが空かない。

「日本の習慣通り、開始は朝9時。夕食時間は5時に日本のスタッフ、8時にフランス側と2度に分けよう」

シアンピ監督の提案に両国のプロデューサーが驚いた。夕食時間を2度も取ったら制作費に負担が出る。「郷に入れば郷に従う。互いの郷を尊重して仕事をしよう」。そんな決断をしたシアンピ監督に私は魅力を感じ始めていた。



「忘れえぬ慕情」の撮影場面

ジャン・マレーふんする造船技師を追って長崎まで来た恋人役のダニエル・ダリューと乃里子役の私が恋のさや当てをする場面。啖呵（たんか）に近いフランス語を立て板に水で浴びせるのに、私のフランス語では勝負にならなかった。

シアンピ監督の口添えで助太刀してくれたのは恋敵役のダニエル。発音からフランス風言い回しまで教えてくれた。そのダニエルが言った。

「イヴはすごい人よ。医大から地下運動に入り、ノルマンディー上陸に加わったの。大勢の負傷兵の命を救って勲章をもらったし、戦争ルポを撮って賞も受けたのよ」

若い軍医だったシアンピはヒトラー邸炎上からナチス占領下にあったシャンゼリゼ大通りをド・ゴール将軍が凱旋するまでを16ミリカメラで撮影し、そのドキュメンタリーが世界的ヒットになっていた。

撮休の日、シアンピ監督が私の純和風の住まいを見たいとやって来た。「神棚と仏壇が同室にあるのはなぜ？」と聞かれた私は神仏習合の歴史を英仏習合の下手クソな言葉で必死に説明した。それで彼は私が熱心な仏教徒だと勘違いし、後に私たちの結婚式が教会を避け、美しい谷間の村役場で挙げられることになろうとは思ひもしなかった。

「君の名は」の熱気で長崎口ケは見物人が群がり、撮影がしばしば頓挫した。そんな状況を考慮し、シアンピ監督は長崎で有名な料亭に私を招待してくれた。初めての一对一にドキドキした。彼には修羅場をくぐってきた人の沈着で深い静けさがあった。寡黙だが知性とユーモアがみなぎり、骨太な人柄に惹（ひ）かれた。

「あなたには好奇心がある。日本も素晴らしいけど、地球上には色々な国があり、生き方がある。僕が招待するからヨーロッパやアフリカを一緒に見てみませんか」

複雑だったに違いない私の顔を見て、彼は笑った。

「『卵を割らなければオムレツは作れない』という諺（ことわざ）がある。色々な国を見て、それでもやっぱり日本がいいと思ったら帰ってくればいい」

「そんなことしていいの」

「あなたは自由なんだ。阻むものがあるとしたら、それはあなた自身だけだ」

（これってプロポーズ？）

私は恋に落ちた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（15）決別「パリヘ」シャンピに電報 駒子演じ切った朝 涙止まらず

2020/5/16付 | 日本経済新聞 朝刊

私が一世一代の覚悟で臨んだ映画「雪国」のロケ撮影の初日である。雪の連山に囲まれて私を負った島村役の池部良さんが素足にげた履きで凍えた雪解け水の川に入る。

セリフもないし、川を渡るだけのカットが何回やっても豊田四郎監督は気に入らなかった。駒子役の私の負ぶさり方が「芸者になっていない」とそっぽを向く。心がささくれ立ち、雪解け水より凍えてきた頃、「やっと芸者らしくなった。でも新橋の芸者だ。温泉芸者になっていない」

そんな撮影が1週間も続いたある日、酔った駒子がしどけなく島村に甘えるシーンを何回もテストした後、豊田監督が言い放った。

「お二階さん、照明消して早飯にしよう。岸クンに駒子をじっくり考えてもらおう」

「早飯にしないで、もう一度やらせてください」

初日以来、物も喉に通らず、やつれ果てた私が叫んだ。すると池部さんが寄ってきて内緒事のようにささやいた。

「すき焼き、好きかい？」

（えっ、何がすき焼き？ 奈落の底に落ちるかもしれないこの瞬間に……）

第一、私はその頃、すき焼きが大嫌いだった。

「今夜、みんなですき焼きを食おう」

池部さんの目を見て、何かがぐらっと揺れたように思った。瞳の奥に漂う深い優しさに私の駒子が碎け散り、豊田監督の駒子が肌に忍び込んできた。白けたスタッフが気の毒そうに見守る中、本番が回った。私はそれまでとは違う駒子になっていた。

「いいじゃないの、お駒さん。とっても良かったよ」

豊田監督がくしゃくしゃの笑顔で手までたたいて喜び、私の胸の中に熱い焰が燃えた。岸クンがお駒さんになり、私の駒子が監督の駒子にすり替わった瞬間だった。

「雪国」はそれまでの私への決別の映画と決めていた。女優としての私、祖国、両親、愛してきたすべてのものへの決別。イヴ・シャンピの言葉の端々を心に刻んでいた。

「人の一生には何度か二者択一の時がある」

「卵を割らなければオムレツは作れない」

オムレツは食べたいけれど卵を割りたくないという未練がましさは私にはなかった。「雪国」出演が決まった時、私は自分の卵を割った。

1957年5月1日にパリのあなたの元に行きます—— イヴ・シャンピに電報を打った。結婚の決意を両親とにんじんくらぶの若槻繁代表にだけ打ち明けた。3人とも青ざめた笑顔で目を潤ませた。

それからは必死で三味線の稽古をした。生まれて初めて持つ三味線に誓った。「駒子が弾く大薩摩（おおざつま）を吹き替えなしで自分が弾く」。そして6カ月間、指先に血豆ができるほど夢中になって稽古し、大薩摩を立派に弾き終えた。



「雪国」で池部良さんと=映画演劇文化協会提供

女優としての私への決別の禊（みそぎ）だった。私は駒子に恋し、池部さんが演じる島村に恋し、監督やスタッフに恋した。

最後のワンカットを撮り終えたのは徹夜明けの朝方。結髪室で自毛で結いあげた日本髪の前結にハサミが入り、プツンと音がした。私の24年間への決別の音だった。

切られた髪が肩にばさりと散らばった。体が震え、堰（せき）を切ったように涙があふれ、私は号泣した。その私を島村の衣装の池部さんが腕組みをして窓に寄りかかり黙ったまま、じっと見つめていてくれた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（16）旅立ち パリでフラッシュの出迎え 仲人探し難航 現れた川端先生

2020/5/17付 | 日本経済新聞 朝刊

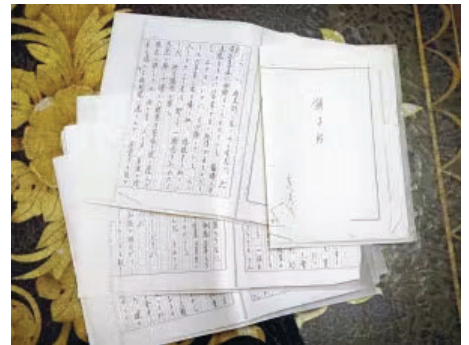
「雪国」の撮影が長引いて、小津安二郎監督が私のために書いてくれた「東京暮色」にも、今井正監督の「夜の鼓」にも出演できなかった。

パリ行きを遅らせれば良かったのに（一世一代の約束を変えるなんて女が廃る）と思った。私が諦めた2つの役はにんじんくらぶの仲間、有馬稲子さんが演じてくれた。

こうして1957年5月1日、私はパリの空港に着いた。エールフランス機のタラップを降りる私にフラッシュが焚（た）かれ、抱えきれないくらいスズランの花束が贈られた。私は24歳。夕映えの美しいスズラン祭りの日だった。

「忘れえぬ慕情」は劇場を観客が十重二十重に囲むほどの大ヒットとなった。フランスだけでなく欧州や中東など多くの国が歓迎してくれた。

それまでの日本は19世紀の美術史に革命をもたらした浮世絵の世界であり、映画では「雨月物語」の幽玄美、「羅生門」「七人の侍」などの傑作であったが、今の日本を描いたものはまだ少なかった。



学生時代に書いた短編小説「梯子段」

一般の人々にはフジヤマ、芸者、黄金の国ジパングがうっすら知識としてあっただけだったと思う。「忘れえぬ慕情」で私が演じた乃里子は長崎を襲った台風で死んだ。しかし廃墟（はいきょ）となった町にすくと立ち、明日に向かってたくましく生きる日本人の姿に観客は拍手したのだった。

さて、パリに到着して3日後に迫った私たちの結婚式には日本と同じように仲人が必要だった。シャンピ家に集まる作家や文化人らの進言もあり、気後れを感じながらも、文化大使として評判が高かった某氏に仲人を依頼した。

その方はにこやかにシャンピと談笑した後、私を見た顔がにわかに硬くなった。

「あなたは『君の名は』とやらでスターになったと聞きましたが、私にも立場がある。仲人はできません」

「……失礼致しました」

私は息が止まるほど驚いた。謝罪しながら心にツララが刺さった。面談室を出る私の足がもつれ、シャンピがドアを開けた途端、別の驚きで卒倒しそうになった。目の前のソファに座っていたのは数日前、元結をバツンと切って決別した最後の映画「雪国」の原作者、川端康成先生だったからだ。湧きあがる幻想の中で私はボタン雪に埋もれ、あふれる涙で心が溶けた。

私的旅行が許されなかった当時、パリで開かれた国際ペンクラブ世界大会に出席するため、日本会長の川端先生が公式訪問されていたのだ。

川端先生はそのままシャンピ家まで来てくださった。

「仲人？ 私がやりますよ」と即座におっしゃった。

昼時になり、シャンピ家の給仕長が銀皿から白アスパラガスを優雅に配った。私がフランスに着いて初めての昼食だった。ナイフを使ってはいけない物が3つあると聞いていた。サラダ菜、スパゲティ、アスパラガス……。 (じゃ、どうやって食べるの?)

川端先生は細い指で白アスパラガスをヒョイとつまみ、ベシャメルソースに浸してパクリと食べた。すてきだった。

「今、アスパラが旬ですね。とてもおいしい」と言いながら私の眼をじっと見た。

「四谷の宿で座布団に隠した小説を見せてください」

「あれは……捨てました」

「嘘でしょう」

嘘だった。そんな私たちをシャンピが深い視線で見つめていた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（17）挙式 シャンパン300本 お祭り騒ぎ 新婚旅行先で盲腸 心ない仕打ち

2020/5/18付 | 日本経済新聞 朝刊

1957年5月4日。パリ北郊30キロにあるヴァルモンドワという谷間の村役場での結婚式には女優ダニエル・ダリューのほか川端康成先生ら多くの著名人が集まった。

イヴ・シャンピ側の仲人は川端先生と親しいフランスの文豪で医師でもあるジョルジュ・デュアメルさん。彼の大邸宅がこの村にあった。

デュアメル家の3兄弟のうち2人が夫のイヴと同じ医大出身。披露宴は親友でもある次男ジャンの屋敷で三日三晩、華やかに続いた。広い庭の随所に火が焚（た）かれ、花火が打ち上げられた。村中の人を招待し、シャンパン300本を空けてのお祭り騒ぎとなった。このにぎわいは長いこと語り草になっていたという。

私は睡眠時間ゼロも珍しくない掛け持ち撮影が続く状態から別世界に飛び込み、心は幸せに満たされたが、一方で体に異常も覚えていた。ヴァルモンドワでの3日目は寒い日だった。歯の根が合わないほどの寒さに全身が震えた。



イヴ・シャンピとの結婚式

祝い客には当然のことながら大勢の医師がいた。夫をはじめみんなが「大決心した後の長旅で疲れ果て、風邪を引いたのだろう」と思っていた。湯たんぽを抱えて寝た私は翌日には元気になり、みんなに見送られて3ヵ月という長い新婚旅行に発った。

陸路でイタリアまで行き、ヴェニスから船でアドリア海を回ってギリシャの遺跡巡りをする計画である。「日本とは異なる国々や文化を見せたい」という約束を実行するための壮大なプランだった。

南仏へ走る国道7号線から見る景色は素晴らしく、歓声を上げていた私は次第に辺りが暗くかすんで体に重苦しい鈍痛を覚えた。そして動くことさえできなくなった。「風邪ではない。盲腸かもしれない」と夫が即断した。

「一度、盲腸で苦しんだの。撮影中だったので手術しないで散らせたことがある」

「それを知らないで湯たんぽとは……」

その日は5月8日。フランスの戦勝記念日で全国の病院は閉鎖。パリに次ぐ大都市のリヨンまで行き、非常勤医師が手早く手術をしてくれた。不幸中の幸いは彼が執刀の名医だったこと。私は丘の上にある尼僧院の病室に寝かされ、麻酔が効き、ベッドにぐっちゃりと伸びていた。意識が戻っていない私は騒然とした病室の雰囲気になんかが起きたのだとぼんやり感じた。

それはとんでもないことだった。1、2分間ほど席を外した看護師でもある尼僧が病室に戻った時、若い男がベッドにのしかかり、手術直後の私の額に乗せてあった氷嚢を外してフラッシュを焚き、写真を撮っていたのだ。尼僧に続いて夫や執刀医も後を追ったが、若いパラッチはすばしこく逃げ切ったという。

間もなく日本の新聞に私がベッドにぐったりと寝ている惨めな写真が載った。「これが岸恵子のフランス到着後の姿である」。意地悪なコメントにあざんとした。

パリに住む高田美（よし）という女性カメラマンが結婚式の一部始終を撮り、日本に送っていた。その他多くのフランス人カメラマンが送った写真は華やかな花火の下、たき火を囲む友人たちの真ん中にある夫と私の姿だった。

マスコミはそれら幸せな私よりも、萎えきってベッドに横たわる私を選んだのだ。

（何たること！）

でもこんな些事（さじ）で私の日本を恨みはしないとも思った。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（18）新生活 壮麗な邸宅 文化サロン 「役立たず主婦」奮起 民間大使に

2020/5/19付 | 日本経済新聞 朝刊

フランスでは何もかもがまぶしかった。夫の父が世界的なピアニスト、母がヴァイオリニストだと知っていたが、学生時から自立している夫の住まいの途方もなく幻想的なたたずまいに息を飲んだ。

私を虜（とりこ）にし、女優にしたジャン・コクトーの映画「美女と野獣」はこの時代の私に運命として絡んでいたようだ。私を魅了するシャンピ邸の内装の美しさと奇抜なアイデアが「美女と野獣」を担当した高名な美術監督が手掛けたものだと知って驚いた。

5階と6階をぶち抜いた高さ7、8メートルはあろうかというアトリエ風の天井。広々としたリビングの4分の1は円を描いた書棚が占めていた。初版物の書籍は革表紙で装丁され、「YVES・CIAMPI」と名前が刻まれていた。

書棚を抱くように伸びるレトロな階段の踊り場は宙に浮いたような食堂になっており、この場所で川端康成先生が白アスパラガスをつまんでパクリと食べたのだった。

時折、集まる詩人や作家、スクリーンで見知った映画スターなど高名な文化人たち。東京の日仏会館で学んだフランス語や東大の前田陽一教授による特別レッスンでたたき込まれた独特のアクセント発声法が大いに役立ち、私はすべてを捨てて選んだ未知の世界に膨大な夢を持った。



長嶋、王、野村各氏や有馬稲子さん、萬屋錦之介さんと（パリの自宅）

シャンピ家にはル・コルドン・ブルー料理学校を首席で出た素晴らしい女性料理人がガヴァナーとしてすべてをつかさどり、彼女に仕える秘書や下働きのお手伝いさんがいた。会食時には彼女の夫が作法に則（のっと）った給仕人になる。

主婦として私ができることは免許皆伝・師範の腕で来客を瞠目（どうもく）させる派手な花活けをするくらいだった。シャンピ家に集まる錚々（そうそう）たる人たちはニッポンというはるか遠い異国からやって来た私自身や大胆な花活けのことを褒めそやしてくれた。

けれど、私は新しい生活に何かを築き上げたかった。何も自分らしさを表現していないのに皆から愛しまれるのがこそばゆかった。何もかもが満ち足りている贅沢（ぜいたく）は性に合わなかった。私は役立たずの主婦の座を放棄して、遮二無二フランス語を勉強した。

そんな私に大使館から依頼があった。「忘れえぬ慕情」が巻き起こした日本ブームに乗じて、パリ随一の百貨店ギャラリー・ラファイエットが「日本展を催すので四季を象徴する振り袖を展示したい」というのだ。そんなものが大使館にあるわけもない。

日本を去る時、私は禁じられていた金銭は一切持ち出さず、代わりに何十枚という着物を持って来ていた。そこで申し出に応じることにした。

私が提供した4枚の振り袖は見た人々が歓声を上げてくれたが、強い照明に当てられたせいで色があせ、その後、着ることができなくなった。

次なる依頼はオペラ座の「蝶々夫人」の衣装。夫人役のソプラノ歌手は大柄でたいそうな肉付きだった。ソプラノ歌手は恐縮して見事なマロニエの花束を贈ってくれたが、5枚目の振り袖は長期間の公演に使われて無残な姿に変わった。

私は知らぬ間に「民間大使」として重宝されていた。

野球の知識はなかったが、長嶋茂雄、王貞治、野村克也各氏がパリにいらした時にはシアンピ家に幾度もお招きして、当時流行のツイストを踊った。夫は日本人男性の立派な体格や礼儀正しさに感心したものだった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（19） 義母 豪快な人柄に魅了され 「地の塩」 自由愛し信念貫く

2020/5/20付 | 日本経済新聞 朝刊

私は装いというものを大事だと思っている。その人の抱えている文化や心意気、美意識も含めたそれらを表現する一つの要素と思うからだ。

まず日本で作った靴がパリの空気に合わなかった。私は身長に比べて足が21センチと極端に小さい。シャンゼリゼ近くに注文靴を作る有名店があった。2人の女友達に伴われてその店に入った。愛想よく迎えた女店主が私の足を見て、厚化粧の顔を膨らませた。

「そんな小さい靴は作れません。子供の靴屋に行くか……。植民地へ帰るんですね」

（植民地？）私はフランスにも人種的偏見があるのかと驚いた。24歳の私と同年のテレーズという威勢の良いパリっ子が私の腕を取り、ドアを開けながら言い放った。

「この店に来ないように言いふらすわ。汚いユダヤ人」

強烈な憎しみの言葉に私は鳥肌が立った。店の外で別の友人ニコールがほほ笑んだ。

「私もイスラエル人なの」

「あら、何てことを私は言ったの。ごめんなさい」

テレーズは慌ててニコールに謝った。2人の会話に私は混乱した。（ニコールはなぜ自分のことをユダヤ人でなくイスラエル人と言ったのか。そもそもユダヤ人って何？）

その夜、夫や両親と知人も一緒に食卓で私は自分の混乱を解いてもらおうと思った。

「ユダヤって人種のことなの？ 宗教のことなの？」

一同が愕然（がくぜん）として私を見詰めた。「『ユダヤとは何ぞや』という人がまだいたなんて。それが僕の妻だなんて」と夫が感極まった声を出した。

義母がゆったりと笑った。

「ユダヤ人は長い間、世界に離散していて国がなかったの。ある事件がきっかけで祖国再建運動（シオニズム）が興り、建国を宣言したのがほんの10年ほど前のことよ」

その事件は私もうっすらと知っているフランス国内を二分した19世紀末の「ドレフュス事件」だと義母は続けた。

ユダヤ人であるために軍の機密を漏洩した犯人にされ、手足を鎖でつながれ悪魔島に流されたアルフレッド・ドレフュス大尉は陸軍で唯一のユダヤ人士官だった。「ニコールはドレフュスの孫なのよ」

私は息をのんだ。そしてユダヤ人にも純粋と、片方の親だけユダヤ人という人への差別があると知り、驚いた。

「塩の入ってないスープはおいしくないでしょう。塩が入ると味は変わるのよ」



夫(左)と義父母と一緒に歩く（仏ヴァルモンドワ）

義母の言葉を聞き、まだ若かった私は聖書を読み漁（あさ）り、「地の塩」（マタイ福音書。腐敗を防ぐ塩のように人心の模範であれというイエスの教え）という言葉を見つけた。

義母は他文化や他民族に寛容で自由を愛し、自らの信念を貫く豪快な人だった。

ある日、クリスチャン・ディオール本店にお供した。

60歳を過ぎた義母は真っ赤でド派手な帽子を買った。彼女に手を差し伸べた私に笑顔を見せ、ハリウッドスターのように手すりにもつかまらずに階段を降りると、足を踏み滑らしてステーンと転んだ。

慌てて駆け寄る私を拒み、すぐに立ち上がった義母は真っすぐ大鏡に向かい、何事もなかったかのように大きな帽子をひょんと被り直した。

義母は年老いた手ではもうヴァイオリンを弾かず、弟子も一切取らなかった。

「私は天才なのよ。雑魚に教えるのは嫌」。そんな義母に私は魅せられた。そして彼女には少しばかり「地の塩」が入っているのではないかと思った。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（20）復帰 ソルゲ主人公の映画企画 フルシチョフ感動 ソ連でも上映

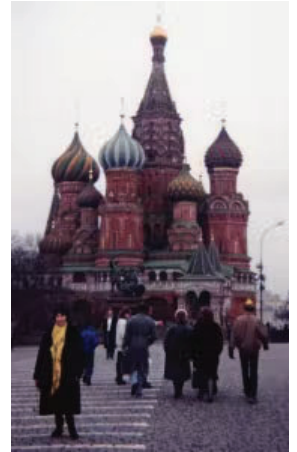
2020/5/21付 | 日本経済新聞 朝刊

結婚後7年間。日本では私的な海外旅行が禁じられていたが、夫は私が親孝行の里帰りをするため、年に1、2回ほど飛行機の往復チケットをプレゼントしてくれた。

初めて里帰りした時、タラップを降りる私は黒山の報道陣と「風花（かざはな）」という台本を持って迎えてくれた木下恵介監督の姿に心底驚いた。決別したはずの女優なのに日本映画は私を忘れずにいてくれた。

しかも「会社が売り出したメロドラマ女優」と私を嫌い「女の園」に配役するのを拒んだ木下監督が「あなたは僕が思っていた女優とまったく違って」と「風花」への出演を強く望んでくれたのだ。私は感動して「風花」の主演を演じた。こうして図らずも私は映画界に復帰した。

「風花」のロケは悪天候で待ち時間がかなりあった。その間、私は太平洋戦争前に日本を舞台に活動したソ連のスパイ、リヒャルト・ゾルゲの獄中手記を読み、ゾルゲ事件（1941年10月）に関する資料をむさぼり読んだ。



何度も訪れたモスクワの赤の広場で

猜疑（さいぎ）心の深いスターリンはドイツの対ソ侵攻（バルバロッサ作戦）を事前に伝えたゾルゲの正確な情報を当初、無視したが、その後「日本軍が対ソ攻撃せずに南進する」と見抜いたゾルゲの歴史的な極秘情報は窮地に立っていたソ連に多大な利益をもたらす。

だがスターリンは特高に逮捕され獄中にいたゾルゲを救おうとせず、ゾルゲは44年11月7日のロシア革命記念日に東京で絞首刑に処された。

20世紀最大とされるスパイ事件の首謀者ゾルゲは（ファシズムと戦い、自分なりの思想と手法で世界を良くしようと夢想した革命児だったのではないかと私は思った。

浅学非才な私が事件の是非を判断するつもりはない。だが「軍より確かな知識と複雑な国際情勢を分析できた人は彼を置いて他にいない」と司馬遼太郎さんが語るように私は人間ゾルゲに魅力を感じ、映画「ゾルゲ氏よ、あなたは誰（原題）」の企画を立てた。

私の情熱が夫を動かし、日本を舞台に活動した彼や仲間の姿を描いた合作映画が封切られたのは61年6月21日。邦題は「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」となり、一部がメロドラマ仕立てに変えられてしまったが、欧州で大反響が起り、モスクワ映画祭に出品することになった。けれど映画はモスクワの土を踏まずに突き返されてしまう。検閲試写で作品を見たソ連の某政府高官が言い放ったからだ。

「ゾルゲという人物は我が国に存在しない。ソビエト連邦にスパイはいなかった」

ところが後日、フランス駐在のソ連大使が作品を直接クレムリンに送り、「こんな素晴らしい映画を棄却したとは」とフルシチョフが感動してくれた。映画は無事にソ連で上映。モスクワの21館で闇切符が出回るほどヒットした。

ゾルゲの故郷アゼルバイジャンの首都バクーにはゾルゲの記念公園や記念碑が作られ、通りもでき、記念切手まで発行された。私は思想や生き方には様々な違いがあるということを身にしみて知った。

徹底した取材を元に監督を務めた夫とともに私はフルシチョフに招待され、専用機で広大な国土を見聞し、赤の広場にそびえるクレムリン宮殿でもてなされた。

夫がフルシチョフと懇談している間、婦人たちにウオッカを勧められた私は記念としてウオッカのグラスを頂いた。だが自慢のあまり帰りの飛行機で周囲に見せびらかしてすっかり機内に忘れてしまった。生来のドジが顔を出したのだった。残念！

(女優)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（21）市川崑監督「おとうと」で野暮な姉役 「口をポカンと…」一言で開眼

2020/5/22付 | 日本経済新聞 朝刊

「スパイ・ゾルゲ 真珠湾前夜」のロケ撮影で泊まっていた京都のホテルの部屋がノックされ、ドアの向こうに立っていたのはタバコをくわえた有名な監督だった。前触れもない訪れに私は慌てた。

「はじめてですね。市川崑です」。脚本を持っていた。

「五所平之助監督の『たけくらべ』のあなたは素晴らしかった。おいらんになり切っていた。ぜひ一度仕事をしたいと思っていました」

監督が差し出したのは映画「おとうと」の脚本だった。

「げんという姉娘を演じられるのはあなたしかいない」

こうして市川監督と女優としての私の長くて心にしみる道行が始まる。初めのうちはチグハグでうまくいかなかった。「表に出ようか」と言われてセットを出た。「あんたのげんは違うんだ」。市川監督の瞳に困惑があった。

「げんという娘は野暮（やぼ） ったくて色気もなければ頭もよくない。センスなんてかけらもない。弟のためだけを思っている姉なんだ。弟思いはよく出ている。でもあんたのげんは艶やかで姿が良すぎる」

私は途方に暮れた。ステージ裏で木の切り株に腰掛けた市川監督は困り果てていた。

「どうしたらいいんでしょう。げんを演じるのは私しかいないと仰いました」

「あんたしかいないんだよ。僕に見えているげんが恵子ちゃんには見えていない」

私に見えていないげん……。どうすればいいのか？ ほとんど絶望的になった。

「まず、骨と皮しかないほどに痩せてくれないか」

「私、ほぼその状態だと思いますけれど」

監督の眼が宙に浮いて何かを思いついたようだった。

「たとえば、いつも口をポカンと開けていてみようか」

「えっ？ ……」

この一言で私の中の何かが撓（しな） った。締まりなく口をポカンとあけている状態で市川監督が描きたいげんの息吹が私の息吹と重なった。体の隅々にげんの所作がにじみ出てきた。やぼったい着付けも、鈍で健気（けなげ） なげんも。今、臆面もなく言いたい。監督のたった一言で私の演じたげんは完璧なものになったと。

「おとうと」はその年の映画賞の多くをかつさった。

皮肉なことに結婚のためすべてを捨て去ってからのの方が作品に恵まれ、女優としてもましになったと思っている。

ところが世間というものは面白い。マスコミは少し前から奇想天外なことを書き始めた。岸恵子は金に困って日本に出稼ぎに来たと。



市川崑監督と（パリの自宅）

「マジかよ。ホウキで掃き寄せるほどギアラを積まれても、我が日の本の国は貧乏で外国送金などもってのほか。円では飛行機の切符も買えないんだよ。そんなことも知らないのか。意地悪したいなら実のあることを考えろよ」

お風呂場の中で大きな声で啖呵（たんか）を切った。私にはうれしいことも、嫌なことも、セリフ仕立てにしてお風呂で独り言をいう癖があるのだ。

こんなこともあった。結婚後すぐ「我がスターが振り袖を着て、街頭でジャガイモの皮むき器の宣伝をして稼いでいる」という哀れをうたった嘘八百を有力週刊誌が半ページも割いて掲載した。しかも写真付きである。

それは振り袖を着た私が発明コンクールで優勝したジャガイモの皮むき器の作者に満面の笑みでトロフィーを渡している写真だった。

「突飛（とっぴ）で面白い記事だね」

夫が笑った。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（22）負債と終焉 次々大作、超過した予算 ノーギャラ出演続けるも俳優離脱

2020/5/23付 | 日本経済新聞 朝刊

結婚して6年後の1963年5月に待望の娘を授かり、夫と私は幸せの絶頂にいた。

娘がかわいい盛りににんじんくらぶ制作の映画「怪談」が企画され、私は2話の「雪女」への出演を依頼された。娘や夫と別れての長期撮影は辛かった。けれどにんじんくらぶは映画界の常識を破り、囂々（ごうごう）たる非難をものともせず、私が久我美子さん、有馬稲子さんとともに設立した日本で初めての女優3人による独立プロダクションである。

「怪談」は小林正樹監督の野心が膨らみ、贅（ぜい）を尽くした撮影になった。「雪女」の撮影は長さ250メートルもある飛行機の格納庫に京都のペンキ屋さんを総動員して空を塗り描き、すすき野を作った。

空に浮かぶ雲は唇、目、太陽に図画化され、カンヌ国際映画祭の出品作にもなった。だが映画祭の上映前夜、試写で批評家から「太陽がダリの作品を模している」と批判され、小林監督は4部オムニバスの2作目で私が演じる「雪女」をカットしてしまった。

夫や友人に囲まれて映画祭に出席した私はひどい失望と屈辱感に打ちのめされた。だが「怪談」は審査員特別賞を獲（と）り、世界各国で上映された。東宝は多額の収益を得たと思うが、代表の若槻繁さんは東宝から約1億円の契約で制作を引き受けていた。

彼は優れた芸術家だったが有能な経営者ではなかった。

制作費（約3億円）の超過分の多くはにんじんくらぶの負担になる。にんじんくらぶは次々と大作映画を世に送り出し、俳優陣も増えて豪勢な大所帯になったが、「怪談」の制作で負債が膨らみ、所属俳優が1人抜け、2人抜け、肝心の久我さんや有馬さんまで抜けてしまった。

私は「怪談」の出演料はもちろん若槻さんが仕掛けた広告のギャラまで含めてビター文受け取らず、制作費と借金の返済に回した。くだらない美談と嗤（わら）うなかれ！ 自分の責任を果たしたかったのだ。

にんじんくらぶ制作の作品にはすべてノーギャラで出演した。でもその意気込みに水を差されたのは「岸恵子に貸した500万円」という新聞記事を読んだ時。半紙の片隅に書いた私のサインを使って借用書が作られ、私への貸出金として500万円が若槻さんに渡っていたのだ。まったく身に覚えのない話だった。ひどいショックを受けたが、若槻さんもさぞかし辛かったのではないかと思う。

私は人が良いのか、責任感が強すぎるのか、テレビドラマ「女・その愛のシリーズ 鶴八鶴次郎」にも無料で出演した。演者の多くが劇団民藝（みんげい）の方々だった。後日、飛行機で偶然お会いした奈良岡朋子さん（現劇団民藝代表）に劇団民藝の俳優たちのギャラが半分しか支払われていないと聞かされて愕然（がくぜん）とした。

「恵子さん、あなたは責任を取っているつもりでも私たちは関係ないのよ。あなたを信用して皆出演したのよ」

尊敬する彼女の指摘で私は痛恨の思いに暮れた。これが「にんじんくらぶ」の終焉（しゅうえん）だった。

月日がたち、米映画「ザ・ヤクザ」に出演中の私を若槻さんが京都まで訪ねてきた。

「恵子ちゃん、初心に帰って作家になってほしい」

私の名前を明記した新しい会社のパンフレットには私が書く予定とされる小説の作品名まで記載されていた。どんな表情で首を横に振ったか覚えていない。がっくりと肩を落として立ち去る姿が私が見た彼の最後だった。その寂しい姿が今も胸に痛



にんじんくらぶの事務所で

い。

(女優)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（23）我武者羅 夫に女性の影 離婚を決意 見抜いた娘が失踪 思考止まる

2020/5/24付 | 日本経済新聞 朝刊

「親孝行をしてらっしゃい」と飛行機の切符をプレゼントして飛行場まで送ってくれた夫は「早く帰って来て」とほほ笑みながらも寂しさを隠さなかった。その夫に感謝しながらも、日本へ、米国へと私の不在はいつも長引いた。

私の不在が重なった頃、頭が良くて優しく、私より華奢（きゃしゃ）で離婚歴があり「子供2人の親権さえ奪われてしまった」とメソメソ泣きながら私に訴える女性が夫の事務所に入出入りするようになった。私は胸を開いて彼女を迎えていた。

パリから南へ120キロほどの別荘で夫は「火星人」という短編科学映画を撮っており、十数人のスタッフが別荘に泊まり込んだ。パリの料理人など家事熟練者たちをそこには連れて行かず、私がすべてを取り仕切ることにした。

パリでは役立たずの主婦のうつぶんを晴らし、農家の女将さんたちに手伝ってはもらったが、主食は私独りで作った。朝早く起きると俳優シャルル・ヴァネル（「恐怖の報酬」などに出演）がトーストを焼いてくれたりした。



夫と一人娘とくつろぐ（パリの自宅）

私は幸せだった。身が持たないほど仕事があると私は生き生きとする。何にもすることがない状態は私をふぬけのようにむなしくする。例の女性がそこにもよく現れた。彼女が夫と特別な関係になるなんて考えもしなかった。

夫は結婚前のガールフレンドたちを隠さずに紹介してくれた。知性がきらめく明るくてしなやかな強さを持つ魅力的な人々だった。けれど例の女性の頭の良さにはうかがい知れない歪（いびつ）なものがあつた。

それを見抜いたのは10歳の娘である。田舎の家にまで入り込む彼女に我慢が出来ず、娘は撮影が終わり、スタッフも夫もパリへ引き上げた日の夕暮れ、忽然（こつぜん）と姿を消した。

村中が騒然とした。夫はこの辺りで不可欠な人物だった。無医村であるこの一帯に病人が出ると、パリの仕事を放って駆けつけ、無報酬で治療した。ある時には機械に挟まれて肩に重傷を負った農夫をパリの医師仲間に頼み、手術を成功させた。夫は村中から慕われ、愛されていた。

大事な一人娘が姿を消したというニュースを知り、村人は狂ったように娘を探してくれた。私の顔にはひと刷毛（はけ）の生氣もなかったという。

麦畑のあぜ道に娘の自転車が乗り捨てられていた。通りかかった車にさらわれたのかと私はおびえた。月が昇り、夜が更けた頃、隣家の広大な麦畑の中で打ちしおれて泣いている娘をその家の主婦が見つけてくれた。

親しかったその主婦から娘の傷心の理由を聞き、あまりのショックに体が凍えた。しがみつく娘を抱き取りながら、パリから飛んできた夫の懇願にもかかわらず、私は我武者羅（がむしゃら）に離婚を決意した。その日は1973年8月11日。41歳の誕生日だった。

とてつもないことが起きると私の思考は止まってしまう。せつかに結論を出し、それに向けてまい進してしまう。じっくり考える技を私は持っていないのだ。

夫と私は田舎の家の池のほとりで菩提樹の葉群れの影に白い藤椅子（とういす）を並べ、深々と身を沈めて話したり、黙り込んだりした。長い沈黙の後、夫がポツリと言った。

「僕は君の日本には到底……勝てないと思った」

空はバカバカしいほど青かった。とめどない悲しみが私の心に散らばっていった。

(女優)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（24）別居 夫から独立 仕事にまい進 大作断った無念 扶養の義務辞退

2020/5/25付 | 日本経済新聞 朝刊

カトリック教徒が多いフランスでの離婚は長びく。離婚成立の前に「別居」という制度があり、私はそれを取り入れた。祖国を離れ、未知の街パリへ着いた日から18年たった1975年5月1日。スズラン祭りの日差しが凱旋門を紅に染めた時、我が家と思って住んだ夫の家を去った。

娘、愛犬ユリシーズ、そして嫁入り道具の三面鏡を乗せた自動車のバックミラーに滂沱（ぼうた）として涙を流す夫の姿が揺れながら遠のいていった。

「パパ……！」と娘がつぶやいた。凱旋門に近いパリ右岸にあった高級住宅地から、娘の仲良しが住む左岸の学生街に引っ越した。仮住まいはまだ建築中で電気はあったがガスが引けてなかった。

5月1日はメーデー。開いている店は花屋と酒屋と菓子屋だけ。自動車に積めるだけ積んだ本を重ねてテーブルを作り、「寿」と染め抜かれた赤いちりめんの風呂敷を掛けた。それは横浜の実家からフランスへ嫁いだ時、母が近所に配った引き出物だった。

職人さんが忘れたらしいトンカチが転がっていた。私はそのトンカチで即席テーブルを叩きながら、調子っぱずれな声でよさこい節を歌った。私を見かねたのか、娘と仲良しのナタリーがシャンパンを買ってきて乾杯してくれた。

「ママンの新しい人生のために」。紙コップに注いだシャンパンをチラッとなめて顔をしかめる11歳の2人の少女に私もシャンパンを掲げた。

「18年前の今日、私は日本という祖国から独立したの。今日はかけがえのない夫からの独立なの」

私はボロボロと涙を流してキラキラと笑った。ぬれた瞳の娘が背中に隠していたらしいスズランの花束を私に放り投げるようにくれた。そこには娘の万感こもる思いがあったのだろう。翌日、夫が当座必要なものを運んでくれた。その中に、義母がデザインした24人分の素晴らしい銀食器類があった。

「これは母が僕と恵子の結婚祝いに贈ってくれたもの。他の誰にも使われたくない」

それが聞こえたらしい娘がつと立ってドアの外へ消えた。幼い娘がどれほど傷ついたことか。87歳になった私が後悔しても詮無いこと。

生活費や教育費を払うのは父親としての義務であり、権利でもあると言ってくれた夫の誠意もかたくなに断り、私は仕事に打ち込む生活を選んだ。あの頃の私の一途さには異常なものがあつた。

今にして思う。

おぼろ月夜の麦畑で泣きぬれた10歳の娘を抱き取った時、なぜ唐突な離婚を思い立ったのか……。私なりに結婚生活への疑念があつた。

自分を殺して幾つかの映画の大作を断った無念さも鬱積していた。「雪国」の撮影中にデヴィッド・リーン監督が世界的ヒットになる「戦場にかける橋」で私の役を書き、相手役ウィリアム・ホールデンさんもわざわざ日本まで勧誘に来てくれたのに、私は「雪国」で映画という卵を割っていたのだった。リーン監督は無念がってくれたが、私のための「役」を削除した。

出演できなかった数々の映画。それらへの慚愧（ざんき）の思いが私を暴挙に走らせたのだ。



離婚を決意した日に撮ったスナップ写真

私は長年愛しんだ「家庭」という卵も割ってしまった。

この時の日本の法律は私が父親でないので娘に日本国籍をくれなかった。以降、娘が結婚するまで私は女盛りを働きながらパ
リで過ごすことになった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁
じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（25）細雪 豪華スター競演で仲介役 ミスキャスト・序列...「最高」と監督

2020/5/26付 | 日本経済新聞 朝刊

1982年夏の盛り、市川崑監督から電話があった。

「恵子ちゃん、帰って来てや」。いつものことだった。初対面は京都にいた私を前触れもなく訪れて「おとうと」の脚本を渡された。以来、市川監督は事務所も通さず、パリの私に直接電話をかけるのが習わしになっていた。

「悪魔の手毬唄（てまりうた）」の時の会話はこんなふうだった。

「今度は殺人鬼や」

「え、人殺し？」

「それも5人や」



4姉妹の長女役で出演した「細雪」

殺人鬼でも、強盗でも、恩人と仰ぐ監督の依頼に応じる覚悟はできていた。ただし私はアクション物やミステリーが好きではない。市川監督の美しい映像、切れのいい編集をもってしてもこの類の作品は苦手だった。撮影がたけなわになった頃合いに頼んだ。

「先生、ただの連続殺人の謎解きじゃつまらない。セリフを足してください」

夫が生ませた子を次々と殺してゆく温泉宿の女将が罪状を告白する場面で、私は脚本にはないセリフを言った。

「酷い男と分かってても、好きやった……。どうしても忘れられまへんのや」

私は数あるこのシリーズでこの一言が「悪魔の手毬唄」をただのミステリーに終わらせず、切なさを添える人情物にしたと思っている。たとえ手前味噌とそしられようと。

82年夏の市川監督の電話はいつもより威勢が悪かった。

「ミスキャストなんやけど、しゃーない。出てや」

「どんな役ですか」

「細雪の長女や」

「先生、それは無理。私音痴だから大阪弁っぽい訛（なま）りができないし、あの姉娘は山本富士子さんがぴったりです」

「そやねん。お富士さんの役やねん。けど都合があって出られへん。東宝の社長が岸恵子でなきゃダメだと言っている。あんたには無理やと思うけど、しゃーない。お富士さんの代わりやってや」

ノコノコ出て行った私も私だけけど、大変な役回りをやる羽目になった。NHKの大河ドラマ「おんな太閤記」で人気を博していた佐久間良子さんが物語の中心になる次女役だった。当然クレジットのトップは彼女のはずだが、スターとして燦然（さんぜん）と輝く吉永小百合さんが2番手になる。

4人姉妹だから長女から順番の配列が良いという説もあった。私自身はクレジットの順番などどうでもいいと思っていた。ところがこの世界では日本に限らずどこでも俳優の番付は重大であるらしい。

「恵子ちゃん、助けてや」 市川監督に言われて東宝本社に出向き、本家と分家に分けるという名案を出した。私は長女だが分家の身。物語の中心が本家なので次女がトップで分家の私が後回しになっても納得がいくと収まった。

ミスキャストと言われた肝心の私は？ 試写で脚本家の日高真也さんが「千両役者」とヤジを飛ばしてくれた。市川監督も「いいじゃないか。最高の鶴子だよ」と笑った。「どこが」と私は鼻白んだ。

「着物の着方が最高だよ。そろっぺでだらしがなくて」

「それほめ言葉？」

2008年に市川監督が旅立たれ、お別れの会で写真に向かって私は弔辞を述べた。

「先生、そちらの住み心地はいかがですか。『ちょっと来てや』なんて電話しないでくださいね。そそっかしい私は荷物まともていそいそと出かけるでしょうけど、まだやりたいことがありますので」

こんな席で笑い声が沸いてしまった。大好きな先生、ごめんなさい。

(女優)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（26）永遠の別れ「パパが…」娘が国際電話 飲まなかったシャンパーニュ

2020/5/27付 | 日本経済新聞 朝刊

「細雪」の撮影を終え、パリのサンルイ島にある自宅に帰った私はキッチンへ直行して冷蔵庫を開けた。シャンパンの瓶がぼつんと立っていた。冷やしたのは半年ほど前の暑い夏の終わりだった。

離婚後かなりの歳月がたっていた。離婚という大手術はお互いを冷静にし、長所を認め合うゆとりのようなものが生まれた。イヴ・シャンピは短すぎた生涯の最後まで私の支えになってくれた。

私たちは娘のために日曜日の昼食をいつもともにした。けれど私の手料理が並んだ食卓に娘が最後まで同席することはまれだった。口実をみつけて中座することが多かった。その都度、父親の切ない面差しを見るのは辛かった。

太陽のように明るい娘は寡黙になり、偉大なピアニストである祖父が贈ったピアノに二度と手を触れなくなった。ピアノをやめた娘は乗馬に夢中になり、危険な障害コンクールに次々と挑戦して、優勝カップを部屋に並べた。



イヴ・シャンピと（パリの自宅）

喜んで通っていたクラシックバレエも辞め、空手道場に通い出したのは12歳の時だった。子供から大人へ、ブルジョア的生活からドロップアウトした野趣の匂いがする生活へと自分を改革していった。

1982年、夏の終わりのその日。機嫌よく最後まで食卓にいた娘がデザートのかえたシャンパンを父に渡した。

「ママンが旅に出るの。パパとママンにお別れのシャンパーニュを飲んでほしいの」

「別れのシャンパーニュ？ 恵子はいつ帰ってくるの」

「今度は長い。『夕暮れて』というテレビドラマと市川崑監督の『細雪』の撮影でパリに帰るのは年明けかも」

「ほんとに長いんだね」

食卓に妙なしじまが流れた。離婚は私の度重なる不在が原因だったことをみんなが思い、誰も口に出さなかった。その雰囲気蹴散らすようにイヴはおどけた様子でポケットから出した手帳に何かを大書して私たちに見せた。

「来年2月9日。3人でシャンパーニュを飲む日」

彼の誕生日だった。

「つまんない。せっかく冷やしておいたのに」と娘が言い、「今日あなたと飲みたいな」と私も言った。

「どうしたの。今生の別れみたいなことを言って」と笑いながら、彼は冷蔵庫の内扉にルイ・ロデレール・クリスタルの瓶をストンと収めた。

「2月9日はママン、必ず帰って来てよ。3人一緒よ」

娘の珍しい激しさに私たちは驚いたり、喜んだりした。

翌83年、約束の2月9日。62歳を迎えるはずのその人は来なかった。「細雪」を撮影していた82年11月5日の深夜に娘から国際電話があった。

「ママン、起こしちゃったのね。疲れている声ね」

「日本は真夜中よ」

「ごめんなさい。明日かけるわ。私はとても大丈夫。心配しないで」

「何があったの」

娘の様子に胸騒ぎがした。

「何かあったのね」

「パパが今朝倒れたの」

「どうして？ 今どこにいるの。電話代わって」

「パパは電話には出られません。私がついています」

「何言ってるの」

「ママン、ママン……。パパは今朝死にました」

私は絶叫したようだった。

「死んだなんて、何をふざけているの。あなたが冷やしたシャンパーニュ、まだ飲んでいないじゃないの」

私は支離滅裂に壊れていった。「来年2月9日に」と手を振った笑顔が私が見た元夫の最後になった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（27） イラン 戦時下、単身テヘランへ テロに因縁、元夫の言葉が後押し

2020/5/28付 | 日本経済新聞 朝刊

1984年2月7日14時——。フランスに亡命していたイランの元将軍（旧王制派の重鎮）がパリの真ん中で射殺されるテロ事件が起きた。

現場は義父の愛（まな）弟子で私の友人でもあったピアニストが住む建物の前。その時間に彼女を訪ねる予定だったが、突然の長電話があったので時間に遅れた。もし予定通りに行っていたら、巻き込まれて死んでいたかもしれない。

何かの因縁を感じ、ジャーナリズムへの関心が私を無謀な行動に駆り立てた。

「自分の目で見て肌で感じる」というイヴ・シアンピの言葉に後押しされ、事件2カ月後、私は単身イランの首都テヘランに降り立った。51歳だった。

テヘランの街は未完成のビル群の窓枠が髑髏（どくろ）のように不気味で、巨大クレーンが木偶（でく）の坊のように立っていた。それは79年1月に国外亡命したパーレビ国王の近代化政策による栄枯の残像だった。

代わって亡命先フランスから帰国し、イスラム革命を指導したホメイニ師体制下のイランでは黒地に白でプロパガンダを染め抜いた横断幕が翻り、イラクのフセイン大統領の白装束人形が首をくぐられ、木々に吊（つ）るされていた。



チャドルを着たイラン人女性たちと

イラン・イラク戦争の真っ最中。外国人女性による一人旅にはかなりの危険が伴った。テヘラン駐在の商社マンや新聞社の特派員の方々の親切がなければ、私の旅は不毛に終わっていただろう。

英語を話すイラン人ジャーナリストのハミード・アラギさんにはお世話になったが、毎朝の服装チェックには参った。「タグーティすぎる。着替えてください」。タグーティとは西欧化とか、反イスラムという意味だとか……。

女性の肌や髪は男性を惑わす邪淫とされ、黒いスカーフで隠さないと風紀紊乱（びんらん）の罪で警察に連行されてしまう。その日、私はスカーフを被り、長いスカートをはいていた。

「ストッキングから肌が透けて見えますよ」

「え？ これは足よ。チョッピリの足」

「チョッピリの足でも女体の一部です。ズボンにはき替えてください」

4月とはいえ、暑い中東の日盛りである。全身蒸れながら想像外の世界を歩き回った。バザール（市場）で見たチャドル姿の威勢の良い主婦たち。金曜礼拝の僧侶による性愛のお説教には落語家も思いつかないほど際どい表現や笑い転げるユーモアがあって驚いた。何よりもイランの民衆は心優しく親切だった。

そんなある日、テヘラン南部にある共同墓地「ベヘシュテ・ザフラー」で異様な光景に慄いた。赤い血の色に染まった噴水が高々と飛沫を上げている。地雷探知に駆り出されて爆死した少年たちへの供養とのことだった。私はこっそりシャッターを切った。

墓地は縁日のように明るかった。顔も体もさく裂した少年の亡骸（なきがら）を棺おけにも入れずに穴に埋葬するのを見て、「殉教すれば天国に行ける」というプロパガンダに殺された若者の最期に胸が詰まった。

その時、サイレンが鳴り、銃を構えた兵士たちに私は囲まれた。「タグーティな外国人の女があちこちで写真を撮り、我々の聖地を汚している」と通報があったらしい。

同行人の弁明がなかったら、私は政治犯が収容、処刑される過酷なエビン刑務所に危うく連行されるところだったと聞かされた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（28）ナイル 娘が念願のリポーター役 酷暑・砂嵐...裸族の姿に感動

2020/5/29付 | 日本経済新聞 朝刊

1984年11月にイランを再び訪問してから帰国すると、異常な高熱に見舞われた。

「セーシェル諸島でデング熱、インドネシアでアメリカ鉤虫（こうちゅう）。あなたはまめに奇病を拾ってくる人ですからね」

イヴ・シアンピと親しかった医師が抗生物質を処方しながら「ほかに飲んでいる薬は」と聞いてくれた。「ありません」と私は即答したが、何十年も常用している睡眠薬を失念するお粗末ぶりだった。

後遺症がひどいので医師に「冒険心はしばらく出番禁止です。予防注射が必要な熱帯は絶対にダメ」と念を押された。生来丈夫な私が回復するのに1カ月近くかかり、娘と珍しく平穏な数週間を過ごしていた時、プロデューサーの彦由常宏さんが膨大な資料を持ってパリまで来た。大河ナイル最初の一滴を訪ねるというテレビのルポ番組だった。



裸族をレポートする娘（スーダン南部）

「予防注射を打つのね？」

「2カ月ほどの間隔で7種類9本の予防注射です」

熱帯、特にアフリカはダメと医師に言われたのが1カ月前のこと。しかし、ナイルやアフリカの奥地には抗しがたい魅力があった。野町和嘉さんの写真集「バハレーアフリカが流れる」の躍動する野生の迫力に私は驚嘆していた。

水ぶくれのような癬痕（はんこん）装飾を施した全裸の男女。漆黒の顔や体に牛ふんを燃やした灰を牛尿でこねて塗りたくる。これが彼らのマラリア対策だった。朝は牛のお尻に頭を突っ込み、尿で顔を洗う。

「この裸族はスーダン南部のジュバにいます。お嬢さんに行っていただきたい」

「ちょっと！ うちの娘、牛のおしっこで顔を洗って、牛ふんを塗りたくるの？」

「マラリアにかかるよりはましでしょう」

彦由さんは憎らしいほど愛嬌（あいきょう）のある顔で笑った。

「蚊取り線香やミネラルウォーターを用意しますから」

それでも私は反対した。

「スーダン南部のジュバには反政府ゲリラが跋扈（ばっこ）しているのよ。フランス人技術者も人質になっているのよ」

「ママン、親バカの誇大妄想ね。私は名もなく技術もない学生よ。持参金をつけても人質に取ってくれないわ」

娘は現実的な発言をする。

ナイル川の最初の一滴は標高5109メートルのスタンリー山から滴り落ちる。地中海に注ぐまで全長約6700キロ。酷暑が去り、砂嵐が襲来するまで約2カ月もの間、アフリカ探検家が何人も命を落した難路を踏破するのはかなり過酷な仕事になるに違いない。

だが娘の念願が叶（かな）い、リポーターとして裸族の中で牛ふんを燃やした煙にくるまり、地べたに寝袋を敷いて眠った。神の水と崇（あが）められるナイル川の水を飲んでおなかを壊し、熱も出たが、娘の顔は生き生きと輝いていた。

「人々に恵みをもたらす大河」と古代人が言ったナイルはとてつもなく偉大だった。流域に暮らす人々の生きる姿に感動した。昼は灼熱（しゃくねつ）のセ氏50度近くまで上がるが、夜は凍えるほど気温が下がる過酷な環境。45日間の撮影でお風呂にありつけたのは4回だけ。

髪の毛は砂の粒子で固まってクシも通らず、肌はカサカサにひび割れた。けれど心の芯のようなものがそれまでの私を蹴散らし、頑丈で分厚い熱気のある気配に入れ替わった。映画というフィクションの世界から、私はノンフィクションの世界の住人になったのだった。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（29）家族 看取れなかった母の最期 独りで生きる姿勢 犠牲強い

2020/5/30付 | 日本経済新聞 朝刊

顧みれば、私は世界を旅して何度も危険な目に遭ってきた。果敢だったが緻密な思慮に欠けていた。失敗後、遅すぎる反省や熟慮に励んだ。

誰にも頼らずに独りで生きるスタイルは家族にもひどい犠牲を強いる。1969年12月に私の暮らしを初めて見に来た父はパリで病に倒れ、落葉の散る秋に旅立った（70年10月22日）。独りになった母を日本に、一人娘をパリに残して世界を彷徨（さまよ）う生き方は私自身にもストレスを課した。

冒険好きな娘とは世界の辺境の地をよく旅した。国連人口基金親善大使でベトナムに行った時、娘はカメラマンとして私に奉仕してくれた。

「ママンには見えないものが私には見えた。国連の公式訪問でママンは政府要人に囲まれてベトナムの表の顔を見てきた。私は歩き回ってベトナムの裏の裏を見たわ」



両親を連れてパリへ（69年末、羽田）

枯れ葉剤の影響を受けたり、地雷で手足など体を吹き飛ばされたりしたベトナムの若者たち。酷（ひど）い過去を糧として、頭を上げて生きる人たちの強さに私と娘は感動した。

母はこの頃、くも膜下出血で何度も手術を受け、ひたすら私の里帰りを待つ生活が続いた。13年間の闘病生活を経た99年1月24日。90歳の母は私の帰りを2日後に控え、元気に娘を迎えたいと張り切ってリハビリをやり過ぎたために力尽きてしまった。

母が最期を迎えたその時、私は国連のミッションでアフリカ奥地の水も電気も通信手段もない場所で孤児を抱いていた。母の最期を看取（みと）れなかったうえ、母が息を引き取ったこともパリへ戻るまで知らなかった。何たる親不孝。

娘が結婚して初孫が生まれたのが2000年。あまりの可愛（かわい）さに私は"ババ馬鹿"に明け暮れた。娘夫婦が友人を招いて食事しているのに、昼寝中の孫の泣き声が聞こえると孫の部屋へすぐに駆け上がる。孫を抱きしめて階段を降りた私に娘の悲鳴が飛んだ。

「ママン、泣いてすぐ抱き上げたら悪い癖がつくわ」

しがみつく孫の腕を剥がして娘の胸に返ししながら（祖母という立場になった私にも去るべき時がある）と生涯3度目の決別を覚悟した。

43年間のパリ暮らしに幕を閉じ、横浜の実家へ戻ったのも2000年。68歳になろうとしていた私を市川崑監督が「かあちゃん」という映画で迎え入れてくれた。

この作品で私は日本アカデミー賞最優秀主演女優賞をいただき、市川監督はモントリオール世界映画祭で特別功労賞を受賞なさった。

この頃、私は子供時代からの夢だった物語を紡ぐことに夢中になった。速足で巡りゆく歳月や移ろう人の心。昔見知った顔はみんな容赦なく年を重ねていた。私は高齢の男と女の物語「わりなき恋」を書いてベストセラーになり、舞台上で独り語りを演じた。

慣れない舞台で恐怖と夢に震え、体も心も燃えながら演じた。幸い好評で3年目の公演を娘夫婦が2人の孫を連れて見に来てくれた。つぶらな瞳で私に抱きついた初孫はカッコいい大学生になっていた。

「言葉が分からないのに凄（すご）く感動した。この舞台、オーディションに受かったの？」

孫たちの言葉にあざんとした。私のたった一つの家族は、私がどんな女優であるのかも知らないのだった。

孤独という風景が心の底に広がり、瞳を潤ませた娘がその私を抱きしめてくれた。

（女優）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.

岸恵子（30）フェイドアウト 久しぶりの撮影 私はペケ デジタルに戸惑い、変化を実感

2020/5/31付 | 日本経済新聞 朝刊

2018年秋、私が住むパリ・サンレイ島のアパートの2階（一部）が崩落した。築400年の年代物には様々な災難が起こる。我が家は3階にあるが、異常気象で屋根の煙突から豪雨が流れ込んで私の住まいは水浸しになり、今も修復工事が続いている。

崩落事件のさなか、私は2つの目的を持ってパリに着いた。1つ目は私の手違いで大事な一人娘の出生が日本大使館の領事部に記載されずにいること。つまり私の戸籍に娘の存在がないので、迂闊（うかつ）だった自分の失敗を修復してもらおうという嘆願。2つ目は一生の大半を過ごしたフランスと日本の今昔物語を私の家族を絡めて映像化すること。

様々な構想を抱いてパリに乗り込んだ私を襲ったのは到着5日後の11月17日に起きた「黄色いベスト運動」だった。マクロン大統領の政策への静かな抗議デモから始まった運動の詳細を語るつもりはない。ただ、不特定層が始めた異議申し立てに過激な人々も加わり、運動は革命前夜を思わせる様相に膨らんだ。

私はパリでの年越しも考えていたが、日仏の今昔物語を映像化するというルポ制作を諦めざるを得なくなった。あらゆる交通機関が止まってしまったのだ。動けない。

フランス人は不満を政治運動化する能力にたけている。交通手段を絶たれた市民の連帯性もすごい。愚痴も言わず、自転車やローラースケートで仕事場に行く。そして、運動は新型コロナウイルス問題が深刻化するまで続いた。

私は娘に送られて争乱のパリを去った。メトロの駅名が「ピエール・エ・マリー・キュリー」（ノーベル物理学賞受賞のキュリー夫妻に由来）というパリ南郊に住む家族の元へ帰る娘を抱きしめて、私も日本への一歩を踏んだ。

母は東へ、娘は西へ。振り向きながら去ってゆく娘を万感の思いで見送った。

2019年5月1日、令和元年の初日にエッセー集「孤独という道づれ」を出し、同じ年にテレビドラマにも出演した。このドラマは作品も演出も共演者も素晴らしかったが、私自身はペケだった。

久しぶりに撮影に参加し、私は言葉にならない程の驚きを感じた。歴史は変わるという非情な実感だった。

女優になったのははるか昔。フィルムが高価な時代で演出家はあらかじめカット割りを作っていた。同じ芝居を多角面からダブって撮るという贅沢（ぜいたく）はほとんどなかった。

何度でも消せるデジタルに変わった今、同じシーンを3台のカメラで何度も撮る方式に私は参った。そして、この世界から完全にフェイドアウトしている自分を悟った。

「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」という有名な言葉がふと頭に浮かんだ。消え去る前に残しておこうかと思ってお引き受けた「私の履歴書」。この1カ月、読んでくださった方々に感謝したい。

5月というのは私に尊い出会いと別れをもたらした月である。日本から去り、夫から去ったのもスズラン祭りの5月1日。今年その日、娘が自宅に咲くスズランの写真をメールで送ってくれた。パソコン画面に朝露をまとったスズランの花の群れが咲いた。

「ママンのすてきな5月1日のために庭先のスズランを」と娘の一言があった。

（女優）



日本とフランスの今昔物語を映像化する構想も温めているという＝中西裕人氏撮影

=おわり

あすから囲碁棋士、名誉棋聖 小林光一氏

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.